

---

# 異世界トリップっぽい

藤袴 奥継

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界トリップっぽい

### 【Nコード】

N8585X

### 【作者名】

藤袴 奥継

### 【あらすじ】

なんだか、よくわからないうちに異世界に飛ばされ、迷宮にとばされ、モンスター倒したり、レベルアップしたりする話し。初投稿の練習用作品です、稚拙な文章ですが暇つぶしにでも、読んでいただけたら幸いです。

## 1 話目っばい

俺、如月士郎キサラギシロウは困惑していた。

ここは、どこだ？

確か俺は、会社で仕事して、電車で帰ってきて、家のドアを開いたんだよな…、いつから俺の家は荒野になったんだ？

玄関開けたら、荒野にポツーン、しかも今は、夜10時のはずなのに頭上には太陽が燦々と輝いていて、なんだかわけがわからない。とりあえず、どっか人がいないか、交番がないか探そう…。

彷徨い歩く事、数時間、どうやら人のいる場所に出れたみたいだ。

俺、運がいい…と思いきや、あきらかに、日本人に見えない人々が…、町並みも日本というよりは、中世ヨーロッパといった感じ、舗装されてない土そのままの道路に、風車のついたデッカイ建物、道は馬車が行き交い、何より日本語で会話してないっばい。

道を聞くとかできねええええ。

言葉通じねえ相手に話しかけるとかできねええええええ。

俺は人見知りやっちゅうねん。

途方にくれつつも、未練がましく町？の外周をフラフラ歩いていると石柱が3本程あった、文化遺産ぽい広場に出た。

正面と左右に石柱が建っていて、その中央に魔方陣っぽいものがある。何だろうか？と、思って近づいていって、魔方陣の上に乗ると、

ぶうううん

と音がして、景色が変わった。

???

混乱しつつも、あたりを見回す、前後、左右と煉瓦で造られた壁があり、その壁に剣が数本立てかけられている、壁と剣の他には、ドアがいくつもある。

ドアはあるけど、完全に密閉された空間だ。

あの魔方陣は転移装置か何かだったのだろうか？どっかの屋内にとばされたっぽい、足元を見たが魔方陣っぽいものはない、もどれないっぽい。

まあ、戻れないものはしょうがない。

というか、最初の荒野にポツンの時点でもうアウトだしなあ。なんとなあーく、剣とか魔方陣とかがあるってことは、俺はファンタジー世界にでもやって来たってことなのかなあ？、とか考えてみる、よくある異世界トリップものみたいに召還されたりしたのかね？とりあえず、考えていてもしょうがないので、壁に立て掛けてあった剣を一本取り部屋を出てみた。

## 2話目っばい

部屋を出てみると、外にはモンスターっばいものがいた。

見た目はちよつと人間っばいが、肌が緑色で顔がのっぺりしている。体全体が鱗で覆われていて、正直キモイ、頭にはちゃんと髪の毛がふさふさと生えていて、生意気にもさらさら金髪ヘアーである。

そいつがイキナリ襲い掛かってきた。

ブンッ！

と、腕を振り回してきたのだが、こいつ、動きがメッサのろい。

難なくかわし、剣で斬りつける、こっちからみて左側の腹から右上の肩口まで剣をなぎ払う。

ザクッ！

つと、体に食い込んだ剣は意外と抵抗なくモンスターの体を切り裂き、上半身と下半身がさようならして、真っ二つになったモンスターは、そのまま影がうすくなり消え去った。

モンスターが消え去った後、なんとなく、体に力が溢れたように感じた。

経験値でも手に入れたのかね？

倒したモンスターは跡形もなく消え、経験値を手に入れると…、これでお金も落としてくれれば、まんまRPGなんだけどねえ。

あの後、ちらほらと見かけるモンスター剣で斬りつつ、フラフラと歩いていると

【ピロリロリロリン、シロウはレベルが上がった】

という、音声が頭に響いてきた、モロにRPGすな、俺は異世界ファンタジー飛ばされたんじゃない、ゲームの世界に入ってしまったのだろうか…。

それにしても、レベルってなんだ？っていうか今、何レベルだ？とか、考えていたら、頭の中にステータス画面が浮かびあがってきた。

|         |       |
|---------|-------|
| N A M E | シロウ   |
| L V     | 2     |
| H P     | 1 2 0 |
| M P     | 1 4 0 |
| S T     | 1 2 0 |
| S T R   | 1 5 3 |
| V I T   | 1 6 1 |
| D E X   | 1 2 1 |
| A G I   | 1 6 1 |
| I N T   | 1 7 0 |
| R E S   | 1 3 0 |

L V 2 か…、ステータスは軒並み100を超えているけど高いのだ

ろうか？正直よくわからん。

まあ、これも今考えてもしようがないんだろうなあ、そのうちわかるだろ、探索を続行じゃあ。

と再度探索を続けていると、前方にちよつと大きめの部屋が見えてきた。

大きめの部屋の中にはたくさんの緑色モンスターがいた。

さっきの奴だ…、あつ、目が合った、一斉にコツチに向かってきた。

とろい動きでコツチに向かって来る緑色モンスター、そして出入り口に引っ掛かった。

まあ、人ひとり通れるくらいの幅しかないから一斉に向かって来るとなるよね。

とりあえず、こいつらは動きが遅いだけでなく知能も低い事が判明した。

たぶん、カラスとか犬よりバカなんだろうなあ。

とりあえず出入り口で引っ掛かってる奴らを斬り倒し、部屋の中へと踊り入る。

囲まれて圧殺されるとヤバそうだが、こいつら動きがとろいし、頭も悪いから連携なんてしないだろうし、そうそう囲まれたりしないだろう。

斬る 切る KILL とブンブン剣をぶん回しモンスターを薙ぎ払う、数十体ほどモンスターを屠ると

【ピロリロリロリン、シロウはレベルが上がった】

という、音声が頭に響いてきた、本日2度目のレベルアップですな、ステータスは…、

|         |       |
|---------|-------|
| N A M E | シロウ   |
| L V     | 3     |
| H P     | 1 2 1 |
| M P     | 1 4 0 |
| S T     | 1 2 1 |
| S T R   | 1 5 4 |
| V I T   | 1 6 2 |
| D E X   | 1 2 2 |
| A G I   | 1 6 3 |
| I N T   | 1 7 1 |
| R E S   | 1 3 1 |

ほとんど上がってないなあ、まあ、いいか…。

剣をもう一振りして、最後のモンスターを倒す、他のモンスター同様消えたと思ったら、なんか落ちてる。

ドロップアイテムって奴か。

落としたものは、何だか茶色くて丸っこい物体だった、というかパ  
ンに見える。

ちっさい、フランスパンといった感じだ。

グウーーーーっ

腹が鳴った。

そういえば昼から何も食ってなかったなあ、腕時計を見ると3時  
指し示している。

午前3時、腹も減るってもんです。

とりあえず、パンを食ってみる、固い、そして、まずい、だが、腹



は満たされた。

腹が満たされたら、眠くなってきた。

考えてみたら、今日はハッスルしまくってた事になるからなあ、体が睡眠を求めてるぜ。

だが、此処で寝るとさっきのモンスターに襲われそうだ。

最初の部屋に戻って、寝ることにしよう、ドアがついていたし何とかなるだろ。

最初の部屋に戻ってきた。

ドアノブに手を掛けてクルリと回し、手前に引いてドアを開ける。部屋に入った後にパタンッ とドアを閉める、ついでに鍵がついていたのでカチャツと回して鍵も閉める、このドア、家の玄関のドアと作りが同じだなあ…、ファンタジーぽくない。

とりあえず、あの緑色モンスターに鍵開けのスキルがあるとは思えないし、オーク材？の頑丈そうなドアだからこれで大丈夫だろう。床に横になって目をつむると、一気に睡魔が襲ってきた。

おやすみなさい。

## 2 話目っぽい（後書き）

ちよーっと、修正

### 3 話目っぱい

翌日、目を覚ます。

一瞬どこにいるのかわからなかったが、煉瓦の壁を見て自分が何処にいるのか思い出す。

夢じゃなかったんだなあー。

のどが渴いたので、コップを持って蛇口をひねって水を出す、そしてコップいっぱいに注がれた水を飲み干す、ゴクゴク、うまい。

：

蛇口？

よく考えると、蛇口から水が出るって、変だよな？  
とりあえず部屋を探してみる。

壁が煉瓦で出来ている以外は、普通のマンションルームって感じだった。

今、俺がいるところは玄関兼キッチンといった感じた、剣が立て掛けられていたのも玄関部分だな。

奥にもう一部屋あって、ベッドが備え付けられている、他には風呂とトイレがあった。

しかも、トイレは水洗、水はどこから来ているのだろうか？

風呂も蛇口をひねるとお湯が出る、シャワーもついてる、いたれり

つくせりだな。

さらにキッチンである此処には、流し台とガスコンロ、なべとフライパン、ナイフやコップに皿もある、調味料の類は置いてなかったが。

とりあえず、いい拠点がゲットできたということで、食い扶持を稼ぎにいきますか！

ガチャ！

っと、ドアを開けると目の前に緑の物体が…

びつくりして、一步引いて部屋に戻る、と、緑モンスターは何事もなく通り過ぎていった。

どうも、部屋の中に入ると俺のことを認識できなくなる、というか、この部屋自体を認識できていないっぽい。

これは、実験してみる価値があるな。

ドアを開けて適当につつかえになる物を置いて、ドアを開けっ放しにしておく、んで、緑モンスターを部屋の前まで誘導してきて、サツ、と部屋に入る。

すると、俺が部屋に入った、とたん標的である俺の事を見失ったのか、フラフラとそのままどっかにいつてしまった。

ドアは開けっ放しで視線は通っているの、見えなくなったから見失ったという事は100%ありえない、部屋にはモンスターを寄せ付けない結界でもあるのだろうか？

何にせよ便利な事には間違いない、深く考えたら負けな気がするの、当初の予定通りにモンスターぬっ殺して食料ゲットするために出かけますか！

今日も緑色モンスターをボコにする、剣でザクザクと簡単に倒せる、そして、50匹に1匹くらいの割合で食い物をおとす。

パン2個としなびた野菜、カッチカチのチーズに塩をゲットLVも4に上がったし、腹も減ったし、部屋に帰って飯にすることにする。

|         |       |
|---------|-------|
| N A M E | シロウ   |
| L V     | 4     |
| H P     | 1 2 3 |
| M P     | 1 4 3 |
| S T     | 1 2 4 |
| S T R   | 1 5 6 |
| V I T   | 1 6 3 |
| D E X   | 1 2 4 |
| A G I   | 1 6 6 |
| I N T   | 1 7 4 |
| R E S   | 1 3 2 |

部屋に帰ってきた。

とりあえず、めしだめし、パンに軽く水を含ませしめらせる、その後、軽く火であぶる。

チーズもあぶって切れ目を入れたパンにぶっこむ、ついでに野菜もぶっこんで簡易ハンバーガーの出来上がりだ。

水を含ませ、軽くあぶったおかげでパンは若干やわらかくなっており、チーズの塩気と混ざって、そこそおいしく食えた。

もう一個のパンは、とりあえず置いておく。

俺の着ているサラリーマンスーツ（間接部はストレッチ素材でウォッシャブル機能つき9万5千円）は意外と収納力があるが、服をパンパンにさせた状態で戦闘したくはないしな。

腹も膨れたし、もっかい緑モンスター狩りじゃー！

：

ザックザック、グシャー　ザックザック、グシャー

延々と緑モンスターを倒していく。

ボグシャー　ボグシャー　ボグシャー　e n d l e s s

：　飽きてきたので、帰る事にする。

今日の戦果は、パン8個、チーズ6個、萎びた野菜5個、塩少々、干し肉1切れ、んでLVが5になった。

N A M E　シロウ

L V　5

H P　1 2 4

M P　1 4 6

S T　1 2 7

S T R　1 5 8

V I T　1 6 5

D E X　1 2 6

A G I　1 6 9

I N T　1 7 5

R E S 1 3 3

今日はもう風呂に入って、簡易バーガー食って寝るか…。

#### 4 話目っばい

翌日：、ここに来てからもう3日目だな、とりあえず腹ごしらえして、今日も狩りに行くか…。

緑の奴らを倒しながらそこいらをウロウロする。

適当に歩いていると、ちよっと雰囲気の違う部屋にでた。

部屋の中央には緑の奴と同じ見た目で体色が赤くなつた奴がいる、色違いだしボスモンスターだろうか？

警戒しながらも近づいていく、緑狩りはもう飽きたんじゃないか！もつと歯ごたえのある奴来ーい！

ある程度近づくと赤い奴が襲い掛かってきた。

が…、

こいつも、とろい、緑の奴より若干速い気もするが相手にならん。

ヒョイツ

と攻撃をかわし、サクサクと剣で斬る、袈裟懸けに斬りつけると一撃で死んだ。

「赤い奴弱っ！ボスじゃねえのかよ！」

赤い奴は、緑の奴同様霞となって消えていった。  
すると、ピコーンと音がしたかと思うと



【ゲートキーパーを倒したので次の階層に進めます、また、ボーナスでレアアイテムと能力が与えられます。レアアイテムから授与します、次の中から欲しいものを選んでください。】

という、音声が頭の中に響いてきた。

そして、目の前に3つのアイテムが置かれていた。

1つ目、剣、金色でピカピカ輝いている、かつこいい、勇者とかがもってそう。

2つ目、革製のミニバッグ？腰につけるタイプのものっぽい、かわいい。

3つ目、ビン、栄養ドリンクのビンにそっくり。

…どれがいいのかわからん、適当でいいか、とりあえずなんか心惹かれたミニバッグをゲットする。

と、手をつけなかった剣と栄養ドリンクのビンが霞となって消えてしまった。

選ばなかったものは消えるのか…、それよりバックじゃ、革製ミニバッグを腰につける、ふむ、いい感じだ。

バックを付け終わると、また頭の中に音声が響いた。

【次のなかから、欲しい能力を選んでください】

【戦士の才能】

【解析】

## 【ドロップ率UP】

ふむ、この3つの内のどれかが得られるのか、まず1つ目はいらんな、モンスター簡単に倒せるし、三つ目はひかれるものがあるがどうせ良いアイテムは手に入らないだろうし、とすれば2つ目かな？解析って事はアイテムの効力とか、わかりそうだな、それに、なにより優先すべきものは情報だろう、せつかく手に入れたアイテムも使い道がわからないと、意味ないし、よし、これに決めた、手に入る能力を決めたことを意識するとまた音声が頭の中に響いた。

## 【ピロリン、シロウは【解析】の能力を手に入れた。】

能力を手に入れ終わると、目の前に微妙に光る魔方陣がでてきた。これに乗れば次の階層に進めるという事だろう。

先に進む前に、ミニバッグの能力が気になるから解析を使ってみよう。

ジーツと、ミニバッグを見る、これで使い方はあつてると、思う…、しばらく見つめてると情報が頭に浮かんで来た。

## 【【無限のポーチ】いくらでも、無限に物が入る、入ったものは亜空間に保存され劣化しない】

おおっ、これは便利なものを手に入れたぞ、ようはドラちゃんのポケットみたいなものか、今まで持ちきれなくて放置していたものをコイツに入れられるし、なにより劣化しないっていうのは大きいなあ。

ためしにポケットにあった、パンを入れてみる。  
明らかにパンの方が、ポーチの口より大きいが、入るような気がする

る。

パンをポーチの入り口に近づけていくと、グニヨンと入り口が延びてパンがスツと吸い込まれた。

取り出すときはどうするんだろ？

手を入り口に近づけると、グニヨンと入り口がのびて、パンがすすると出てきた。

おお！こいつは、かなり便利だぞーあたりを引いたな！

とりあえず、持ってるアイテムを全部ポーチにぶっ込んだ。

これでよし！次の階層に進もう！

魔方陣に乗ると、一瞬、体全体が輝き、次の瞬間には別の場所に入った。

着いた場所は4畳くらいの空間で、左手にドア、前方に魔方陣があった。

この魔方陣に乗ると元の場所に戻れそうだな、乗ってみるか。

前方の魔方陣に乗ると、次の瞬間には見覚えのある場所、ゲートキーパーを倒した場所にでた。

もっかい、ボス部屋の転移魔方陣に乗る。

さっきの4畳間に出た。

とりあえず階層を進んでも戻れる事が判明した、安心設計だな。

次に左手のドアを開けて外に出てみる、すると1番最初いた拠点部屋と同じような場所にでた。

トイレ付き、風呂付、キッチン付きの煉瓦部屋、違うのは今出てきた転移部屋が追加されている事くらいか…。

ああ、あと調理器具の類がおいでない…、最初の部屋からもってこないとなあ。

というわけで、最初の部屋から調理器具を持ってきた、【無限のポ

「チ」があるから楽だった。

それじゃあ、二つ目の階層の探索と行きますか！

毎度のごとくふらふらと出歩く。

2階層目には緑の奴の中に、ちらほらと赤い奴が見かけられた。

ふと、思いついて解析を使ってみる。

ジーッ

緑の奴は【養殖人間】ようしょくにんげんというらしい、こいつらが養殖だとすると、俺は天然人間になるのだろうか？

まあ、そんなことは置いといて、【解析】の能力は相手のステータスも確認できるようだ。

緑の奴のステータスは

|       |       |
|-------|-------|
| L V   | 1     |
| H P   | 1 0 0 |
| M P   | 1 0   |
| S T   | 1 0   |
| S T R | 1 0 0 |
| V I T | 1 0   |
| D E X | 1 0   |
| A G I | 1 0   |
| I N T | 1 0   |
| R E S | 1 0   |

こんな、感じだった。

固体によって多少能力が違うが、平均するところなる。

んで赤い奴の方かというと、名前は【ようしよくにんげん養殖人間・あしめ亜種】でステータスは

|     |     |
|-----|-----|
| LV  | 1   |
| HP  | 120 |
| MP  | 10  |
| ST  | 10  |
| STR | 120 |
| VIT | 10  |
| DEX | 10  |
| AGI | 10  |
| INT | 10  |
| RES | 10  |

って感じだった。

俺のステータスと比べるとダイブ低い、メツチャ弱い、だから楽勝だったのか。

まあ、弱いとわかったら遠慮はいらねえ毎度のようにザクザク行きますか！

ザク　ザク　ザク　endless

赤い奴も何十匹と倒すとアイテムをドロップした、赤い奴のドロップアイテムはトレットペーパーとかティッシュペーパーとか生活雑貨だった。

## 今日の成果

LV5                      LV7

NAME    シロウ

LV        7

HP        128

MP        150

ST        130

STR       162

VIT        167

DEX        131

AGI        174

INT        177

RES        135

生活雑貨多数、食料多数ゲット。

ある程度探索と、赤い奴狩りを終えたので、今日は探索を終えて風呂に入ってめし食って寝る事にした。

おやすみなさい。

#### 4 話目っぽい（後書き）

投稿して改めてわかる、自分の文章力のなさ  
精進せねば！

## 5 話目っばい(前書き)

モンスター解析時のステータスを変更しました。  
思いつきで書いてるので、後から、ちよくちよく細かいところを変更したりします。



## 5 話目っばい

今日も今日とて探索じゃあ！

と、モンスターを倒しつつ探索を続行すると、また雰囲気の違い部屋に出た、通称ボス部屋（俺命名）  
中央にいるのは、青い奴だ。

解析、解析。

【養殖人間・変種】  
ようしよくにんげん へんしゆ

|     |     |
|-----|-----|
| LV  | 3   |
| HP  | 123 |
| MP  | 11  |
| ST  | 23  |
| STR | 123 |
| VIT | 11  |
| DEX | 22  |
| AGI | 22  |
| INT | 20  |
| RES | 12  |

こいつも雑魚だな、サクッと殺っちまうか！

サクツと殺っちゃいました、横薙ぎ一閃です。  
そしてまた、脳内にピコーンと音声が響いた。

【ゲートキーパーを倒したので次の階層に進めます、また、ボーナスで能力が与えられます、ほしい能力を選んでください】

今回はレアアイテムはなしか…、最初のは初回ボーナスみたいなものだったのかな？

能力が得られるだけでも大きいし、問題ないけどね。

今回得られる能力は

【戦士の才能       】

【共通語／会話・読み書き】

【ドロップ率UP       】

という、ラインナップだ。

んー、この中だと…、とりあえず、上の二つはないなあ、【戦士の才能       】は前回と同じ理由でなしだし、会話は話す相手がいない。

ここは、【ドロップ率UP       】にするしかないかあ。

というわけで【ドロップ率UP       】の能力をゲットする事にした。

【ピロリン、シロウは【ドロップ率UP       】の能力を手に入れた。】

魔方阵に乗って次の階層に行く。

前回とおなじく4畳間にでた、左手にドア、右手にはエレベーターのつばいもの、前方には魔方阵。  
エレベーターつばいものが、新しく追加された施設かな？

ジーツ

と見て、【解析】を発動する。

ふむふむ、どうやら、行きたい階層の番号を入れて、ボタンを押すとその階層の拠点部屋に連れてってくれるものようだ。

ただし、自分が行った事のある階層にしか行けないし、この階層より前の階層にはいけないらしい、と、言う事は必然的に今は使えない代物しろものだな。

まあ、入力しなければならぬ数値がアラビア数字じゃないから、どっちみち使えないがな！

先の階層に進んでいけば、使う機会もあるかもなあ、次の能力取得では共通語の取得を考えたほうがいいのかも说不定。

部屋に入るといつこ前の階層同様の部屋だった、ついでに調理器具の類がない、取りに行かねば…。

赤い奴や緑の奴をぬつ殺しつつ、調理器具をとりに戻る。

【ドロップ率UP】の恩恵か、倒せば必ずアイテムを落とすようになった、こいつらの落とすものは腐るほどもってるし、あんまりいらぬけど。

さて、3階層目をかゝく探索して今日の探索はおしまいにするか…。

という事で毎度のごとくフラフラと出歩く、3階層目には、青い奴、赤い奴、緑の奴と3色の養殖人間が出てきた。

どうも、ボス部屋にいた奴が次の階層から通常モンスターとして出

てくるみたいだな・・・。

とりあえず、青い奴が何を落とすか知りたいな…、2階層目のボスだった、【養殖人間・変種】はアイテムをドロップしなかったし、ボスはアイテムを落とさない仕様なのだろうか。

というわけで、青い奴をぬつ殺した結果ドロップアイテムが服の類だと判明した。

シャツとかパンツとか下着の類も落とした、そしてサイズは何故かジャストフィットだった。

倒した人間のサイズになるのだろうか？まあ、何にせよありがたい事だ、ありがたい事だから深く考えない事にした。

それにしても、これでやっと着替えられる、今までずっと同じ服で過ごしていたよ、バッチイ。

今着ている服は風呂場で洗濯しておこう、本当はお日様の下で乾かしたいんだけど、ここじゃ無理だし部屋干しするしかないか…、部屋干しするとちょっと臭ったりすんだよなあ。

orz。

風呂入って、シャツとパンツを着替えて、身も心も衣もサッパリした今日は、ぐっすり眠れた、いつもぐっすり寝ているような気がするが。

## 6 話目っばい

んっ、いい朝だ！

今日で異世界に飛ばされてから…5日目だな…、たぶん…、早くも曜日の感覚がなくなってきたぞ。

そっぴゃあ、元の世界で俺はどういう扱いになってるんだろ？ 搜索願いとかが出されてるんだろうか？

親父とお袋は心配だが…、まあ、まだ元気だったし、姉ちゃんもいるし、俺の貯金も結構あったし、そいつを使えば老後の生活は問題ないだろ、うん。

ああ、やめやめ、こんなん考えても、何にもならん、忘れろ忘れろ、はい！ 忘れた！。

とりあえず、今日は服の洗濯してから、探索に向かうかな…。

メシを食った後に昨日の残り湯で服を洗う、別にガス水道代を払ってるわけじゃないので普通にお湯をだしてもいいんだけど、勿体無いじゃん？

んで、洗った後に服をよくしぼる、その絞った服はいったん置いておいて、煉瓦の隙間にナイフを刺して固定する、コイツを二箇所つくってそのふたつのナイフの柄にヒモを結んでピーンと張る。

そのヒモに服を干す、なんでこんな事をしているかというと、こうしないと服を干す場所がないのだ、赤い奴が物干し竿とか洗濯バサミとかはドロップしてくれたんだけど、流石に物干し竿置く台まで

はドロップしてくれなかったのだよ。  
まあ、とりあえず、そうやって服を干す、干してる場所はベッドルームだ。

どうせ、ベッドルームは夜寝るときまで使わないので、昼にパンツが上のほうでピラピラしても気にならない、メシはキッチンのほうで食うし。

んで、洗濯したスーツに変わって、【養殖人間・変種】ようしよくにんげん へんしゆ（通称青い奴）が落とした服に着替える。

着替えた服は上は綿シャツ＋厚手の綿のジャケット、下はこれまた厚手のズボンで色はグレー、生地はデニムっぽい、足は膝元まである黒い革のブーツ、一言で言うところ冒険者ルック？

前のスーツより若干動きづらいが、多少の事では破れない丈夫さに安心感がある。

さて服も着替えて心機一転、探索じゃあ！心機一転してるのにやることはいつもと同じだがなあ！

青い奴やら赤い奴やら緑な奴やら、うじゃうじゃいる。

こいつらを、毎度のごとくザクザク倒しどっちゃりと服やら生活用品やら食料やらを手に入れ、一旦拠点に帰ってメシを食う。

LVも8に上がった。

|      |     |
|------|-----|
| NAME | シロウ |
| LV   | 8   |
| HP   | 129 |
| MP   | 152 |
| ST   | 132 |
| STR  | 163 |

|             |             |
|-------------|-------------|
| V<br>I<br>T | 1<br>6<br>8 |
| D<br>E<br>X | 1<br>3<br>3 |
| A<br>G<br>I | 1<br>7<br>6 |
| I<br>N<br>T | 1<br>7<br>8 |
| R<br>E<br>S | 1<br>3<br>5 |

昼メシを食った後また探索を続ける。

またまた、どつちやりとアイテムを稼げたが、ボス部屋は見つからなかった。

家に帰ってきて、干した洗濯物を取り込む、綺麗にたたんで【無限のポーチ】にしまう。

替えの服は大量にあるから、服は洗濯しないで、一回使うごとに捨ててもいいかなあという気もするが、やっぱり勿体無いのでちゃんと洗う事にする。

さて、今日は風呂入って、メシを食って寝るか…。

## 7話目っばい

6日目！

今日も今日とて探索じゃあ！

一連の行動、起きる メシ 洗濯、をした<sup>のち</sup>後、フラフラと出かける。  
しばらくモンスターをやつつけながら歩いているとボス部屋にたどり着いた。

部屋の中央には黒い奴が佇んでいた。

漆黒の体に赤い瞳、<sup>しんじき</sup>金色の髪と…ってな感じで、表現すると強そうに見えるんだけどなあ…、たぶん、コイツも…。

まあ解析をかけてみるとわかるだろ…。

【<sup>よつじょくにんげん</sup>養殖人間・<sup>きしょうしゆ</sup>希少種】

|     |     |
|-----|-----|
| LV  | 4   |
| HP  | 133 |
| MP  | 21  |
| ST  | 24  |
| STR | 128 |
| VIT | 23  |
| DEX | 21  |
| AGI | 22  |
| INT | 20  |
| RES | 20  |



ん、予想通りの低ステータス、まあ、他の【養殖人間】ようしよくにんげんと比べたらかなり強いけど。

とりあえず、何も考えずに近づいて行って、剣を振り上げ振り下ろす。

「メーン！」

剣道の真似をして、頭から真っ直ぐに一閃、唐竹割だ、モンスターに反撃の暇も与えず葬り去った。  
例のごとく頭にピコーンと音声が響いた。

【ゲートキーパーを倒したので次の階層に進めます、また、ボーナスで能力が与えられます、ほしい能力を選んでください】

今回得られる能力は…

【レアドロップ率UP】

【共通語／会話・読み書き】

【盗賊の才能】

この三つか…、しつこく出ていた【戦士の才能】がなくなっ  
たな。

代わりに【盗賊の才能】と【レアドロップ率UP】が入ってきたみたいだけど、選べる能力はランダムで決定しているの  
だろうか？まあ、そんな事より取得する才能を決めなきゃだな。  
ここはエレベーターを使えるようにするために、【共通語／会話・

読み書き】を取得するべきだろうか…。

だが…、【レアドロップ率UP】に惹かれる、すごく惹かれる。

うん、どうしようか…。

…

…

…

…いいや！これにしちやえーい！

【ピロリン、シロウは【レアドロップ率UP】の能力を手に入れた。】

うひひ【レアドロップ率UP】ゲッター。

よしっ、次の階層に進むぞ！

例のごとく魔方陣にのり、4畳間にでる。

構造は下の部屋と一緒に、左手の部屋から出て部屋を見渡す、今回は何が増えたかな？と思っていると、部屋の隅っこにドアが1つ追加されているのを見つけた。

そのドアを開けて入ってみると8畳程の空間があって、正面にデスクと銀行とかに置いてあるキャッシュディスプレイのようなものがあった。

とりあえず、見ただけでは用途がわからない、キャッシュディスプレイ

ンサーではないと思う、取り出し口っぽいものがやけにでかいし…。

悩んだときの為の便利スキル、【解析】を使ってみる。

どうやら、自動販売機っぽいものらしい。

アイテムの名前を入力して、代金を入れるとそのアイテムが手に入る、逆にアイテムの買取もしてくれるらしい。

ただ…、入力する文字とかが俺の知らない言語…、たぶんこの世界の共通語なので俺には使えねえ！

次は絶対、共通語を取得しなければ…、ギュッとこぶしを握って決意を固める。

まあ、それは置いて下の拠点に鍋とかフライパンとか取りに行くか…、洗濯物も干しっぱなしだったなあ。

途中、モンスターをザクザク斬りながら進んでいると緑の奴がアイテムを二つ落とした。

1つはいつも落とす萎びた野菜、もう一つは…たんぽぽのような花？葉っぱと茎の部分たんぽぽによく似ている。

ただ、花の部分が胡桃みたいになっている、固そう。

よくわからないがこれがレアアイテムかな？使い道がわからないので【解析】を使う、まじで便利だなこのスキル…、取得してよかった。

名前は【チョコポポ草】というらしい、胡桃っぽい花の部分を割ると中に、甘い実が入っているそう。

さっそく、割ってみる。

ふわつと香るカカオの香り、見た目こげ茶のまあるい物体。

…これは、もしかして…。

口に含んで舌で転がす、まあるい物体が口の中で甘くとけだす、この鼻に抜ける独特の香ばしくも甘い香りと、舌に広がる仄かな苦味と強烈な甘みは…。

間違いないない、こいつはチョコレートだ！チョコの部分なめていると中にはカリカリとしたアーモンドが…、いや、実際にはアーモンドじゃないんだろうけど、アーモンドが入っていた。

香ばしい香りを楽しみながらカリカリとアーモンドを噛み砕く、食べ終わった後は、なんだか幸せな気分になった。

あー、おいしかった、久しぶりの甘味だしなあ。

前の世界じゃいつでも食べたけど、コツチの世界じゃレアアイテム扱いなんだなあ【レアドロップ率UP】とって良かった。

そのまま、拠点部屋で鍋とかフライパンとか洗濯ものを回収し（洗濯物は乾いていた）上の拠点部屋に帰る。

途中で、また1個【チョコポ草】をゲットできた、うまあー。

ああ、ついでに言うとか青い奴のレアドロップは剣だった、んで赤い奴は、魔法の力で光るペンライトを落とした。

さて、ボスを三回倒して3階層進んだわけだから、最初の階層が1階層だとして、今は4階層の拠点部屋にいるわけだな。

とりあえず、昼飯を食った後に、この4階層目の探索を開始しますか。

フラフラと探索をしつつ、途中で見かけた黒い奴を倒すと、コインの様なもの落とした、これが黒い奴の通常ドロップ品だな。使用用途がよくわからないので、【解析】を使う。

…お金だ。

コインは単純にお金だった。

このコインは100クラムコインらしい。

うむ、100クラム（以降クラムをCRMと表記します）の価値がよくわからないが…。

自販機でアイテムの売買が出来るようになれば、価値もわかるようになるだろう。

その後も、探索を続け切りのいいところで、引き上げる事にした。

黒い奴からコインを大量にゲット、あと、青い奴から防具の【ブレストアーマー】をゲット、赤い奴からジッポライターの的なものをゲット、正式名称【チャッカ】マジックアイテムで魔法の力で火を出すらしい、まあ、所詮ライター程度の火なので武器にはならないんだけど。

後、緑の奴がおいしそうなお肉を落とした。

名前は【ラウム肉】、夕飯が楽しみだな。

LVも9に上がった。

NAME シロウ

LV 9

HP 131

|       |       |
|-------|-------|
| M P   | 1 5 3 |
| S T   | 1 3 4 |
| S T R | 1 6 5 |
| V I T | 1 6 8 |
| D E X | 1 3 5 |
| A G I | 1 7 8 |
| I N T | 1 8 0 |
| R E S | 1 3 6 |

その日の夕飯はとてもおいしかった。

まるでラム肉からさらに臭みをとったような味わいで、ひと噛み事にあふれる肉汁、柔らかくて蕩ける様な舌触り、文句なく絶品だった。

ここにきて、俺的、緑モンスター株は急上昇である、よくやっ t t。

ふう…、うまい飯も食えたし何だか幸せな気分だ。

明日もうまいメシのために頑張るぞー！

というわけで、おやすみなさい。

## 8 話目っばい

今日も今日とて探索じゃあ！というわけで、フラフラ出歩く。

モンスターを倒しながらあっちこっちへ進んでいったが、ボス部屋は見つからず、スゴスゴと拠点部屋に戻ってくる。

コインとか、武器とか防具とかマジックアイテムとか手に入れたが、まあ、それはどでもいい。

そ・れ・よ・り・も！

緑の奴がコメと醤油を落としたのだ。

日本人の魂<sup>ソウル</sup>フード、コメと醤油を！コメと醤油を！大事な事だから2回いいました！

ふう…

今日の昼飯はイイものになりそうだ。

電気炊飯器がないので、ナベを使ってコメを炊く事にする。

正直、電気炊飯器以外でご飯を炊いた事がないので、うまくいくか心配だが仕方ない。

おかずは、萎びた野菜を使っておひたしを作ることにする。

しばらく待って、ご飯が炊けたように見えるのでナベの蓋をとって、ご飯をよそつ。

お粥みたいになってた、水の分量を間違えたか…orz。

おひたしをおかずにお粥をすすする。

ちよつと失敗、テンションが下がる、おかずも鮭の塩焼きとかほしいなあ。

メシも食ったし、午後の探索に行くかぁー、という所で、ふと自分を解析できないか気になった。

なんか、スゴイ今更感があるが…。

レベルとか数値のステータスは解析かけなくても見れるけど、解析すれば俺の種族とか確認できるかもだし、見てみよう。

洗面所の鏡に自分を映して見る、視線が通ってないと解析はできないもので…。

まず種族は…【ヒューマン・スカラー・異界種<sup>いかいしゅ</sup>】

ふむふむ、たぶん【人間】〃【ヒューマン】という事なんだろう。

で、スカラーってのはなんだ？よくわかんないな？

スカラー スカラー スカラー…もしかして【scholar】か？

学者、もしくは、学生って意味だよな…。

俺はもう学生じゃないし…、学者ってイメージ的に俺とはかけ離れてる気がするが…、まあいいか。

んで、異界種ってのは俺が異世界人だからだな。

ふむ、ん？所持能力も見れるようだな、どれどれ



【方向感覚】 1度行った事がある場所なら、迷わずにたどり着ける。

【結界無効】 ありとあらゆる結界を存在しないものとして扱う事ができる。

【解析】 モンスターやアイテム等の能力や効力を知る事ができる。

【ドロップ率UP】 モンスターがアイテムを落とす確率を1千倍にする。

【レアドロップ率UP】 モンスターがレアアイテムを落とす確率を1千倍にする。

ふむ、能力の詳細がわかるのは有難いな。

あと、見慣れない能力があるけど、これは俺が元からもっていた能力と考えていいのかな？

【方向感覚】 って、そういや今までマッピングとか全然してないけど一度も道に迷わなかったな！

よし、自分の能力もわかった事だし、探索を開始しますか…。

今日中にボス部屋までたどり着きたいなあ。

というわけで、ボス部屋を探してうるつきまわる、俺。

途中緑の奴が【アラマキ・ジャケ】っていうアイテムを落とした。

うん、その名のとおりの奴です。

今日もうまい晩御飯が食べれそうだ！それとも、あしたの朝飯用に

取っておいたほうがいいのかな？

んで、ボス部屋までたどり着いたんだが。

部屋の中央に今までとは見た目が大分違うモンスターが立っていた。  
【養殖人間】と同じ人型なんだけど、まず大きさが違う、身長が3mくらいある。

腕が太くて臂力があるのを見て取れる、強そう。

体は木で出来ているようだが、貧弱な感じは受けず何百年と生きた巨木のような威圧感がある。

あと、顔の鼻の部分にあたる場所から枝がびよこんと出ていて、葉っぱがついてるのがムカつく、チャームポイントのつもりか！

とりあえず、近づく前に【解析 〽️】を使ってみる。

### 【ウッドゴーレム】

|       |       |
|-------|-------|
| L V   | 5     |
| H P   | 3 5 0 |
| M P   | 6 1   |
| S T   | 1 2 2 |
| S T R | 2 8 5 |
| V I T | 1 8 9 |
| D E X | 1 0 5 |
| A G I | 2 3   |
| I N T | 6 1   |
| R E S | 6 2   |

「ブーッ！」

ステータス高すぎじゃね？

【養殖人間】と比べたら段違いに強いぞ！？

あれ？でも俺と比べたらそうでもないか？イケルか？

俺のステータス

|         |     |
|---------|-----|
| N A M E | シロウ |
| L V     | 9   |
| H P     | 131 |
| M P     | 153 |
| S T     | 134 |
| S T R   | 165 |
| V I T   | 168 |
| D E X   | 135 |
| A G I   | 178 |
| I N T   | 180 |
| R E S   | 136 |

うむ、試しに闘ってみて駄目だったら逃げよう。

## 9 話目っばい

ボス部屋に突っ込み【ウッドゴーレム】に一撃をくらわす。

ガッ！

と、音がして剣が【ウッドゴーレム】の胸部に食い込むが、ほとんど斬れない。

というか、剣が引つかかって抜けない。

【ウッドゴーレム】が、剣を引き抜こうとしている俺を潰しにかかってきたので、あわてて剣から手を離し、パツ！と飛び退り距離をとる。

体には剣が食い込んだままだが、気にも留めずに動いている、こいつには、痛覚とかは無さそうだな。

新しく【無限のポーチ】から剣を取り出し、再度斬りかかる、今度は俺から見て右側になる【ウッドゴーレム】の左足を狙う。

こちらも ガッ！ と音がして剣が浅く食い込むが、たいしたダメージにはなっていない。

まあ、簡単に引き抜けるように、弱めに斬りつけてるのでしょうかがないだろう。

それにしても、木って奴は意外と堅いんだよなあ、まあ、刃が通るだけでしたが。

「おっと！」

【ウッドゴーレム】が回転しながら、右腕で俺を殴りつけてきた。間一髪、拳をかわすと【ウッドゴーレム】の拳が地面を抉<sup>えぐ</sup>った。

【ウッドゴーレム】の拳を中心に直径1m程のミニクレーターが出来上がる。

うわぁ、仮にも煉瓦で出来た地面をこんだけ抉るなんて、なんちゅう馬鹿力だよ。

これは、一発でも喰らったらあの世逝きだな。  
と、コイツ…、今の攻撃でバランス崩してる。

【ウッドゴーレム】がバランスを崩している内にすると近づき再度左足を斬りつける。

動きを観察した結果、コイツの効き足は左足と見た。  
それからは、ずうううううつつつと、執拗に左足を狙っていく。

ふふふ、なんどもチクチク、チクチク、同じ場所を攻撃して、足をぶっ壊してやろう。

左肘鉄をかわし、斬りつける、右の回転ブローをかわし斬りつける、  
右拳の裏拳みぎこぶしをかわし斬りつける。

俺は常に【ウッドゴーレム】の左のお尻側に位置するように動くため、俺を攻撃するには左足を使って回転しなければならない。

右拳による裏拳なら右足を軸に出来るが、それだと俺を視認できないため、攻撃があたらないうえに、俺が何処にいるかわからなくなるので、多用はできない。

よって、左足を軸にして動かざるを得ない、ふはは、どうだ？うざかるう？。

そうして、地味にダメージを蓄積していった結果。

【ウッドゴーレム】の足は、ぼつきり折れた。

ここまで、1時間くらいかった。  
一発でも喰らうと死のデスゲーム、俺もよく集中力がもったよ…。

さて、足がぼつきり折れたゴーレムくん、腕力はまだ健在なので油断すると危ないが。

体がデカイので死角も多い、体の可動域が少ないので、後ろには攻撃できないのは確認済み、だからさっきまで、クルクル回って攻撃してきていたのだろう。

背後からすると近づいて、剣から持ち替えた、斧で頭を叩き割る。

人型だし、たぶん頭が弱点だろう。

頭を壊しても、動くようならちとめんどくさいが粉々にするしかない。

と、まあ、そんな心配もなく頭部を破壊するとゴーレムは霞となって消えていった。

とりあえず、一撃も攻撃を喰らわずに倒せた、というと楽勝だったように聞こえるが。

こっちは一撃でもくらったら終わりだし【ウッドゴーレム】は意外と素早く何時攻撃をくらうかとヒヤヒヤものだった。

とりあえず、ボスを倒したので例のごとくあれがくるだろ…。

【ゲートキーパーを倒したので次の階層に進めます、また、ボーナスでレアアイテムと能力が与えられます。レアアイテムから授与します、次の中から欲しいものを選んでください。】

はいきた、今回はアイテムももらえるのか。

目の前にアイテムが三つある。

1つ目、剣、金色でピカピカ輝いている、かつこいい、勇者とかがもってそう。

2つ目、水晶で出来ている玉、野球のボールと同じくらいの大きさで綺麗な文様が刻まれている。

3つ目、ビン、栄養ドリンクのビンにそっくり。

栄養ドリンクが気になったので、それを取った。  
取ってから気づいたが、先に【解析】を使つとけばよかった。  
後悔先に立たずで、手をつけなかった剣と水晶玉が霞となって消えてしまった。

まあ、いいか。

んで、もらえる能力は以下の三つだった。

【共通語／会話・読み書き】

【盗賊の才能】

【縫製の才能】

ここは迷わず【共通語／会話・読み書き】をとる。

【ピロリン、シロウは【共通語／会話・読み書き】を習得した。】

そして、また、例のごとく次の階層へと進む。

拠点部屋に今回は何が追加されたかなあ？と見ると一目でわかる変化が起こっていた。

ベッドルームの壁の一角がガラス戸に変化している。

ガラガラあつと、戸を開けるとベランダが…。

洗濯物をお日様の下で干したいという願いが通じたのだろうか？

ベランダに出て上をみると雲ひとつない空に燦々と輝く太陽が…。

下を見ると延々と続く真っ暗で何も無い空間が…。

試しに【無限のポーチ】から剣を一本取り出し落としてみる。

ヒューーーーーー

ーッ。

…

…

…

あれ？音がしない…、地面にぶつかった音がしないよ？

たぶん、底なしなんだな、ナニソレ怖い。

これも、深く考えたら負けな気がする。

とりあえず、増えた施設も確認できたし、今度は外に出てみよう。

【ウッドゴーレム】がうじゃうじゃいるようなら、ここでの狩りは一旦あきらめて、前の階層でレベルUPなりしてから再挑戦する事になりそうだ。

あんなの複数相手に戦えん！前後で挟まれたら前の奴に気を取られてるうちに後ろから殴られて、ゲームオーバーだ！



ん？でも、あの大きさと通路は通れないだろうしうまくすれば1対1に持ち込めるか？

まあ、とりあえず、ドアを開けて、外に出てみる。

…ドアの外はこれまでの階層とはだいぶ趣が変わっていた。

一言で言うところ、それも鍾乳石とかがある自然の洞窟みたい。

しかも、結構広い【ウッドゴーレム】くらいのデカさでも余裕で動き回れるくらいの広さだ。

そして、うじゃうじゃとではないが、ちらほらと【ウッドゴーレム】が見かけられる。

俺はスゴスゴと引き返して、前の階層でレベルUPに勤しむ事にした。

帰るときにドアを見ると、何もない空間に浮かんでいて笑えた。

## 9 話目っばい（後書き）

拳を中心に直径60cm程のミニクレーター      拳を中心に直径

1m程のミニクレーター

に修正

ゴーレムの拳は結構でかい設定なのでこれくらいはいくだろうと…

## 10 話目っぽい

さて、そういえば前の部屋に生活用品とか置きっぱなしだったな、取ってこないと…。

うん、共通語を取得したわけだし、エレベーター（またの名を拠点移動装置）を使ってみようつと。

ふむ、ここは5階層でいつこ下が4階層か…、知らない文字が頭の中で再構成されて、わかるようになるっていうのは不思議な感覚だな。

とりあえず、4階層の拠点部屋から鍋とか生活用品を持ってくる。

生乾きの洗濯物もコッチに持ってきて干す、せっかくベランダがあるんだし…。

そして、自販機のほうも使ってみることにする。

『アイテムを売る』と入力して、パンを一個いれてみる。

パンは一個、5 c r m<sup>コラム</sup>で売れるらしい。

今度はパンを買ってみようとする、1個50 c r mするらしい。

今度は剣【ロングソード】を入れてみる、売値は1万3500 c r mで買値は13万5000 c r m…。

色々なアイテムで試して見た結果、売値は買値の10分の1になる事、嗜好品の類はかなり高額になる事がわかった、【チョコポポ】一個が1万 c r mとかする。

あと、生活用品とか食料の値段から換算するに、たぶん 1 c r m

＝ 1円 くらいの価値だろうというのがわかった。

この自販機はこれからかなり利用する事になるだろう、【チョコポ

ポ】とか【ラウム肉】とか買うために…じゅる。

ああ、そういえばさっき手に入れた栄養ビンに【解析　　】を使うのを忘れていたな、とりあえず効力を調べておくか…。

ふむふむ、名前は【ラストエリクシール】で、用は強力な回復薬つてところか。

ドリンク剤の様な見た目に反して、別に飲み薬つてわけではなく、手に持って念じるだけで効果が発揮されるらしい、死んでさえなければ、足がもげようが、心臓が潰れていようがすぐさま再生されるそう。

まあ、そんな状況になど陥りたくはないが結構便利なアイテムだったわけだな、一回こっきりの使い捨てみたいだが。

まあ、色々わかったところで、レベル上げにいくかあ。

というわけで、4階層でモンスターを何体が倒しているとLVが上がった。

いつもどおり【ピロリロリロリン　シロウはレベルが上がった】という音声ながれた後に、聞き捨てならない音声が入った。

【成長限界に達しました、これ以上はLVは上がりません】

えっ？ちよっ？まじで？もうこれ以上LVあがんないの？うそだよね？

LV10で限界って低くない？っていうか、今のままだと5階層の攻略がままならないんだけど。

NAME　　シロウ

LV　　10

HP　　131

|             |             |             |             |             |             |             |             |
|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| R<br>E<br>S | I<br>N<br>T | A<br>G<br>I | D<br>E<br>X | V<br>I<br>T | S<br>T<br>R | S<br>T      | M<br>P      |
| 1<br>3<br>7 | 1<br>8<br>2 | 1<br>8<br>0 | 1<br>3<br>6 | 1<br>6<br>9 | 1<br>6<br>6 | 1<br>3<br>6 | 1<br>5<br>4 |

） 一週間後 （

まじで、LVが上がらない、今までのLVアップのペースを考えるとやっぱり、限界に達したと考えるべきだろうな。  
5階層の攻略どうしよう？

ん〜、一対一で【ウッドゴーレム】倒せたんだし、うまくやれば問題ないかな？

試しに行ってみるか！

…この後、考えが甘かった事を思い知らされる事になるわけだが、このときの俺はまだ何も知らなかった。

しばらくは、【ウッドゴーレム】を避けつつ探索をしていたが、そういつまでも避け続けられるわけではない。

どうしても、通りたい場所に【ウッドゴーレム】がいたために、攻撃をしかける事に…。

一度倒した事もあるし、周囲に他のモンスターがいなければ大丈夫だろうと持っていたのだが。

【ウッドゴーレム】と戦っている間に【養殖人間<sup>ようしよくにんげん</sup>】に背後に回りこまれていた。

正直、【ウッドゴーレム】を相手にするのにいっぱいいっぱい周囲の状況を確認している余裕がなかった。

背後から【養殖人間<sup>ようしよくにんげん</sup>】の一撃をくらう、今まで攻撃をくらったことがなかったのわからなかったが、【養殖人間<sup>ようしよくにんげん</sup>】の一撃はかなり痛い。

HPも30程持つて行かれた、俺の最大HPが131であることを考えればかなりのダメージだろう、とりあえずコイツを倒さなければ。

と、意識を【養殖人間<sup>ようしよくにんげん</sup>】に移したのがまずかった。

意識をはずした瞬間に【ウッドゴーレム】の一撃を肩口にくらってしまった。

咄嗟に体を捻り、衝撃を受け流したが、右腕は肩口からもげ、きりもみしながら5mほど後ろに吹っ飛び壁に叩きつけられた。

イタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイ

右腕は千切れ、肋骨は折れ、内臓は潰れ、口から血を吐き出す。

イタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイ  
タイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイ

脳が悲鳴を上げ痛みを拒絶するために意識を遮断しようとする。

イタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイ  
タイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイ

まずい、気絶はマズイ、早く回復を、痛みをやわらげないと、意識を失えばそこに待つの、死だ。

必死にまだ動く左手を使い【ラストエリクシル】を取り出し、回復しろと念じる。

すると、体の傷が癒え、千切れ飛んだ右腕も再生する。

ついでに、治療が終わっている詰め物をした歯も部位の欠損とみなされたのか、新しい歯が生えてきた。

まあ、そんなことはどうでもいい、俺は即座にその場から逃げ出した。

幸い【ウッドゴーレム】は足が遅い、俺が全力疾走すれば追いつけはしないだろう。

拠点部屋に戻り扉を閉めた後にその場で崩れ落ちる。

ゴーレム怖い、ゴーレム怖い、ゴーレム怖い【ラストエリクシル】  
がなければ確実に死んでたよ、あの時、栄養ドリンクのビンを選んで  
おいて良かったあ。

自分の悪運に感謝しつつも、もう二度と5階層に行かないと決意し

た。

もう、先に進むとかどうでもいい。

この4階層でもうまいメシは食えるし生きていくには困らないしずっとここで暮らしていけばいいじゃないか。

こうして、俺の冒険は終わりを迎えた。

俺はこれからもモンスターを倒しつつ生きていくだろう。

だが、この階層から進む事は、もうない…。

俺の冒険は終わったんだ…。

おしまい

おわりません、まだ続きます。



## 10話目っぽい(後書き)

流石に、こんな少年誌の打ち切りのような終わり方はしませんです。  
でも、ここで更新が滞ったりしたら、終わっただと勘違いされそ  
う。

はやく、続きを書かなければ。

## 11 話目っぽい（前書き）

時間をばして結果だけが残った。

# 11話目っぽい

続き！

あれから数十年の時間が過ぎた

ついに、俺はゴーレムにリベンジする時が来た、見よこのステータス！

|                  |     |   |   |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|------------------|-----|---|---|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
| N<br>A<br>M<br>E | シロウ |   |   |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| L<br>V           | 9   | 5 |   |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| H<br>P           | 5   | 1 | 4 |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| M<br>P           | 6   | 8 | 1 |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| S<br>T           | 5   | 6 | 1 |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| S<br>T<br>R      | 5   | 4 | 9 |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| V<br>I<br>T      | 5   | 0 | 9 |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| D<br>E<br>X      | 5   | 6 | 1 |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| A<br>G<br>I      | 6   | 9 | 0 |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| I<br>N<br>T      | 7   | 2 | 6 |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| R<br>E<br>S      | 5   | 7 | 9 |  |  |  |  |  |  |  |  |  |

え？

LV10で成長の限界に達したんじゃないなかったのかつて？

フフフ、それがだよ、【養殖人間・希少種】<sup>ようしよくにんげん きしやうしゆ</sup>が、極稀<sup>ごくまれ</sup>に成長限界を  
引き上げるアイテムをドロップするのだよ。

それは、もう凄く低い確率で…、だいたい10万体に1体くらいの  
割合だから確立にして0.0001%だな。

まあ、そうして成長限界を引き上げつつ、このLVまでレベルUP  
を繰り返えし続けたのだ、ちなみに現在の俺の成長限界はLV12  
0だ。

なんで、こんなLVになるまで、進まなかったのかつて？

だって、怖いんだもん、LV95になった今でさえ、【ウッドゴー  
レム】と戦うと思うと、ガクブルですよ…。

だが、今日こそ、5階層に繰り出すと決めたんだ。

頬を叩いて気合を入れる、鏡を見て身だしなみを整える、べつ、別  
に時間稼ぎをしているわけじゃないぞっ！？

それにしても、鏡を見て思うんだが、此処に来てから全然年をとっ  
ていない、むしろ若返っているようにさえ見える。

もう、何十年もたっているはずなんだけどなあ。

理由はわからないが、ここはそういう場所なんだろと思って深く考  
えない、これも深く考えたら負けな事象なんだろうな…。

年は取らないけど、髪は伸びてうざい長さになっている、流石に後  
ろの髪は肩口くらいまでで切りそろえているんだが、自分できれる  
のはそれぐらいで。

今や俺の髪型は長髪オールバックになっている、短く刈り込むほう

が好みなんだけどなあ。

筋肉がついて、ガタイが良くなってることもあって、一見ヤクさんに見える、怖い。

いつまでも、うだうだ考えていると、決心が鈍りそうなので、扉を開けて外に出る。

緊張しながらも、しばらく歩いていると洞窟の奥に【ウッドゴーレム】を見つけた。

剣を抜き、じりじりと近づいていく事にする。

今使ってる剣は【バスタードソード】という剣だ、刃渡り1・2m程で柄が長く両手でも片手でも扱える便利な剣だ。

俺的にはもう少し重くてもいいんだけど、これ以上重い剣だと刃渡り2mとかになって取り回しづらいのでこの剣をつかっている。

ある程度近づいたところで【ウッドゴーレム】がこちらに気づき向かってきた。

ここは、自分の力を試すためにも正面から立ち向かう！

と、みせかけてススッと後ろに回りこむ、正面から立ち向かうの明らかに実力差のある奴を相手にするときだけだ。

正面から立ち向かうなんて、馬鹿のすることですよ…。  
っていうか【ウッドゴーレム】怖いし…。

そのまま左足に斬りつける。

ドガッ！ という音と共に【ウッドゴーレム】の足が吹っ飛んだ。  
【ウッドゴーレム】が、バランスを失い後ろ向きに倒れこむ。

頭部がちょうどいい具合に降りてきたので、そのまま剣を頭めがけて振り下ろす、いわゆる兜割りだ。

俺の剣の一撃をうけた【ウッドゴーレム】の頭部は、パカッ と割

れて真つ二つになった。

【ウッドゴーレム】はそのまま霞となって消えていき、後には木片がひとつ残された。

【解析】をかけたみた、【魔法樹の木】というアイテムらしい、たぶん【ウッドゴーレム】のドロップアイテムなんだろう。

「フフフ、フハハハハッ！」

二撃！あれだけ恐れていた【ウッドゴーレム】がたった二撃で墜ちるとは！

圧倒的じゃないか我が軍は！軍などもっていないがな！

その後、テンションが上がってひゃっほい！状態の俺は見かけた【ウッドゴーレム】を片っ端から狩っていた。

【魔法樹の木片】を大量にゲットした。

## 12話目っぽい

翌日、小さいながらも確実な一步を踏み出した俺はさらに上の階層を目指す事にする。

今まで足踏みをしていた分、一気に駆け抜きたい！  
というわけで、ボス部屋にたどり着いた。

目の前に居るのはドラゴンと犬を足して割ったような生物<sup>なまもの</sup>だった。  
犬から毛をとって変わりにウロコをはっ付けコウモリの羽をつけた  
感じた。

その名も【ドッグドラゴン】…、見たまんまである。

ステータスは

|     |     |
|-----|-----|
| LV  | 6   |
| HP  | 130 |
| MP  | 86  |
| ST  | 90  |
| STR | 99  |
| VIT | 66  |
| DEX | 148 |
| AGI | 137 |
| INT | 65  |
| RES | 105 |

と、あまり高くない、むしろ【ウッドゴーレム】のほづが高いと思う。

なんだよコイツ【ウッドゴーレム】より先に出ろよ。

と、思いつつも、攻撃を開始する、…と、すぐに戦闘は終了した【ウッドゴーレム】をも凌駕する今の俺の敵ではなかった。

火を吐いてきたのは驚いたが…、流石はドラゴンと言ったところか。そいでもって、例のごとく音声が響いてきた。

【ゲートキーパーを倒したので次の階層に進めます、また、ボーナスで能力が与えられます、ほしい能力を選んでください】

今回はレアアイテムはなしで、能力は以下の三つから選べるようだ。

【魔法の才能】

【縫製の才能】

【盗賊の才能】

この中だと気になるのは【魔法の才能】かな？  
というか、やっぱり魔法ってあるんだ。

俺は【魔法の才能】をゲットする。

せっかく【魔法の才能】を手に入れたので、試しに魔法を使ってみようとしたが、魔法の使い方がわからない。

「ファイアーボール！」

「アイス！」

「ケル！」



「メガ テー！」

試しにに適当な魔法名を叫んでみるが、全然発動する気配がない。いや、最後のは発動したらヤバイが…。

なんてこった！才能があっても魔法に関する知識がないと使えないのか…。

ちよつと、ショックを受けつつトボトボと次の階層へと進んだ。

拠点には地下室が追加されていた、階段を下りると広い部屋になっている。

窓がないのでちと暗い…、まあ、この部屋を使うことはないだろうから問題ないか。

前の拠点部屋から、生活用品を移して次の階層へ進む。

次の階層で【ドッグドラゴン】を倒し、【犬竜の鱗】<sup>けんりゅうのうろこ</sup>というアイテムを手に入れた。

まがりなりにも竜なわけだし、鱗は防具の素材になるのだろうか？

そのまま探索を続行すると本日2度目のボス部屋にたどり着いた。

一日で二階層進むのは初じゃなかるうか。

ボスはいつこ下の階層にいた【ドッグドラゴン】の色違いで【ドッグドラゴン】が緑色なのに対して、今回ののは青色。

【ドッグドラゴン・亜種】<sup>あしゆ</sup>とかだろうか、【解析】をにかけてみる。

## 【ハイドッグドラゴン】

|     |       |
|-----|-------|
| L V | 7     |
| H P | 1 5 0 |
| M P | 1 0 6 |
| S T | 1 1 0 |

|     |     |
|-----|-----|
| STR | 110 |
| VIT | 67  |
| DEX | 152 |
| AGI | 158 |
| INT | 89  |
| RES | 127 |

名前は【ハイドッグドラゴン】か…、なるほど…、マンネリを嫌ったんですね？わかります。

どちらにせよ、このステータスなら俺の敵ではないな。

剣で一閃、【ハイドッグドラゴン】を倒す。

いつもどおりの音声の後に能力をゲットする、今回もアイテムは無し。

今回は【盗賊の才能】をゲットする。

トラップを見つけたたり、鍵を開けたり、トラップを解除したり、気配を消したり、聞き耳を立てたり、アイテムを盗んだりする才能だそう。

覚えておいて損はなさそうだと思う、この迷宮的なものには罠とか全然出てこないけど、これからは出ないとは限らない。

そのまま、次の階層に進み、拠点部屋の追加施設を確認する。

今回は、地下室にベランダが追加されていた、というか、ベランダがある時点でこの部屋はもう地下室じゃないな。

最初にあった部屋が2階でこの部屋が1階ということになるのだろうか？

なににせよ窓が出来たおかげで、明かりが入ってきて居心地がよくなった。

まあ、この部屋使わないけど。

今日はこの辺で探索をやめ、続きは明日にする。

いつもどおり、風呂は行つて飯食つて寝た。

ちなみに、お金に余裕があるので飯は毎日高級食材を使っている。  
この数十年で自炊能力も上がったよ…。

おやすみなさい。

### 13話目っぽい

さて、次の階層だ！

というわけで、7階層目に突入する。

モンスターを薙ぎ払いながらボス部屋を探して駆け回る。

ここのボスモンスターは「ゴブリン」だった、ファンタジー世界では定番のやられキャラだな。

ステータス

|     |     |
|-----|-----|
| LV  | 8   |
| HP  | 107 |
| MP  | 65  |
| ST  | 65  |
| STR | 108 |
| VIT | 84  |
| DEX | 83  |
| AGI | 62  |
| INT | 81  |
| RES | 65  |

今までのモンスターと違って武器をもっているが、予想に違わず雑魚だったのでサクッと倒して次の階層へ進む。

取得能力は「縫製の才能」に決定。

拠点の追加設備は、1階の部屋のベランダが庭へと変化していた事だった。

日本の狭いお庭と同程度の広さだが…。

そいでもって次階層へと進み、ボス部屋へと一気に突き進む。

ボスは【ゴブリン・ファイター】だ。

## ステータス

|     |     |
|-----|-----|
| LV  | 9   |
| HP  | 128 |
| MP  | 65  |
| ST  | 66  |
| STR | 129 |
| VIT | 104 |
| DEX | 85  |
| AGI | 64  |
| INT | 71  |
| RES | 62  |

鎧と皮製の鎧を装備しているが、こいつもさして強くない、というか今の俺の力だと皮製の鎧ごとぶった切れる、サクッと倒して次へ進む。

取得能力は【錬金術の才能】

拠点の追加設備は、庭が広がっていた事だった。

大体、奥行き50m×横幅100mくらいの広さだと思う、凄く広くなってびつくりした。

とりあえずそれは置いといて次の階層へ進む。

ここも、ボス部屋までずんずん進む。

9階層目のボスは【ゴブリン・アーチャー】だった、ゴブリン3連続。

## ステータス

|     |     |
|-----|-----|
| LV  | 10  |
| HP  | 85  |
| MP  | 65  |
| ST  | 65  |
| STR | 109 |
| VIT | 84  |
| DEX | 129 |
| AGI | 67  |
| INT | 99  |
| RES | 67  |

コイツの武器はアーチャーの名に違わず弓矢のようだ、【ゴブリン・アーチャー】に有利になるようにか、ボス部屋はかなり広い空間になっている。

【ゴブリン・アーチャー】が遠距離からびしびし矢を放<sup>はな</sup>ってくる。一発目、二発目と、矢をかわしながら近づいていく、AGIが上がつている恩恵か今の俺には矢がスローモーションで飛んでくるように見える。

時には避け、時には剣で叩き落とし近づいていく、距離を詰められてしまえば【ゴブリン・アーチャー】に成すすべはない、サクッと【ゴブリン・アーチャー】を屠<sup>ほぐ</sup>った。

能力は【鍛冶の才能】をゲットする。

拠点には1階の部屋のとなりにさらにさらに部屋が追加されていた、40畳くらいあるでっかい部屋だった。もっとも、俺が使っるのは2階の部屋だけなんで宝の持ち腐れなんだが。

2階層下の拠点部屋から、生活用品を持ってきて、昼ごはんにする事にする。

昼ごはんはパンの耳を切らないことによって具をたくさん挟み込む事に成功した俺特性のサンドウィッチを食べながら、今日の予定を考える。

今日はもう、3階層も進んだわけだから、一旦探索を切り上げて武器や鎧の整備でもしようかな？

手に入れた能力の性能も気になるし…。

何気なく手に入れた【縫製の才能】 【錬金術の才能】

【鍛冶の才能】 の三つだが。

三つの才能だと面白い事ができるらしい、何でもMPを消費する事によって、工程をすっ飛ばしてアイテムの生成ができるそうなの。物理的に無理がくる事をやろうとすると、その分MPの消費も大きくなるが、逆に言えばMPさえあれば無茶な事ができるという事だ。その日の午後は探索をせずに、武器や防具の修復を行ったり、服を繕ったり、改造したりして過ごした。

【バスタードソード改】を手に入れた。

説明しよう！【バスタードソード改】とは、既存のバスタードソードに鋼を加えて打ち直し、強度と破壊力の向上を図ったものだ。その分、重量が増してしまったが、今までの重量では物足りなかった俺にとってはこっちの方が使いやすい。

## 14 話目っぽい

翌日！

今日は10階層の探索だ、二桁まで来れたぞ！

この階層から迷宮が洞窟から森に変更された。

森には鬱蒼<sup>うっそう</sup>と木が茂っている部分と、そうでない部分がある。

木が生えてない場所が部屋であり通路なんだろうと思われる、良く出来ている。

さて現在探索している10階層だが、出てくるモンスターは【ハイドッグドラゴン】【ゴブリン】【ゴブリン・ファイター】【ゴブリン・アーチャー】の4体で、LVは大体5〜10程度だ。

どうやらその階層の数値が出てくるモンスターの最高レベルになって、今の階層から3階層下のモンスターまでが出てくる仕様になっているようだ。

それとモンスターの【ゴブリン】だが、武器を使ってるわけだから俺的には、ある程度の知性があるんじゃないかと疑ってたんだが。この迷宮の【ゴブリン】からは知性を感じられない、というかむしろ意思とか自我を感じる事ができない、俺を見たら無条件で襲い掛かる呪いでもかけられてるように感じられる。

まあ、その辺も気にしない方がいい類のものなんだろうが…、何にせよ、この迷宮には不自然な部分が多すぎる気がする。

まあ、今更か…。

とりあえず、ボス部屋へと突撃する！



今回のボスは【ゴブリン・メイジ】見た目はローブを着て杖をもった【ゴブリン】だな。

ステータスは

|     |     |
|-----|-----|
| LV  | 11  |
| HP  | 90  |
| MP  | 132 |
| ST  | 68  |
| STR | 85  |
| VIT | 62  |
| DEX | 87  |
| AGI | 69  |
| INT | 149 |
| RES | 109 |

こんな感じ。

杖をフリフリした後、なんかもにもよと言ったを思ったら、火の玉が飛んできた。

メイジの名前に違わず、魔法を使ってくるようだ。

とりあえず、かわそうと思って左にステップしたが追尾機能があったらしく、ちよつと掠ってしまった。

10ポイント程ダメージをくらった、掠った右腕がひりひりする。

二発目、またも杖をフリフリもにもよした後に、火の玉をうつてくる。

今度は剣でスパーンと斬ってみることにする、なんか出来そうな気がしたので…。

結果は、剣ごと俺が火達磨になった、仮にも高レベルなのでちよつ

と焦げただけですんだが。

アン先生、剣で魔法は斬れないよ、海　斬とか実際にやろうとしても無理だという事がわかった。

三発目、四発目、十何発目と魔法をかわしながら、【ゴブリン・メイジ】の観察を続ける。

と、次弾を放とうとした【ゴブリン・メイジ】が急に魔法を取りやめた。

そして、杖を振りかぶりながら襲い掛かってきた。

どうやらMPが切れたようだ、もう少し魔法の使い方を観察したかったがしょうがない、そのまま剣で一閃して返り討ちにする。

観察してわかったのは、見ただけじゃ魔法の使い方はわからないという事だけだった。

とりあえず、毎度のごとく能力を取得する。

取得能力は【料理の才能】

で、今回はレアアイテムもゲットできるらしい。

【解析】を使って、手に入れるアイテムを決める。

俺は3つあるアイテムの中から【従魔の宝珠】というアイテムを選んだ。

見た目は黒いこぶし大の水晶玉で、表と裏に對<sup>つ</sup>になるように金色の鋳<sup>く</sup>がついている。

このアイテムは、投げつけてあてる事によってモンスターを自分の僕<sup>しもへ</sup>にできるらしい。

ふふふ、これで【ゴブリン・メイジ】を僕<sup>しもへ</sup>にして魔法を教えてもら

うんだ！

喜び勇んで次の階層へと進む。

拠点部屋には1階の部屋の隣に、大理石製の大きな風呂が追加されていた。

香料の入ったいいにおいのするお湯が、こんこんと湧き出て湯船を満たしている。

随分と豪華なものが追加されたなあ、つい入り浸ってしまいそうだ。

とか、考えつつも【ゴ布林・メイジ】を僕<sup>しもへ</sup>にするために次の階層の探索に出る。

しばらく歩いていると【ゴ布林・メイジ】を見つけた。

さっそく【従魔の宝玉】を投げつける、【ゴ布林・メイジ】君に決めた！ってそれは出す方が…。

【従魔の宝玉】は【ゴ布林・メイジ】の頭にあたった後、ゴトリと地面に落ちた。

これで、この【ゴ布林・メイジ】は俺の僕<sup>しもへ</sup>になっただのだろうか？

「やあやあ、今日から君の主人となるシロウだ、よろしく！」

とか言いつつ、さわやか風味に笑顔をふりまき、近づいていつてみる。

と、【ゴ布林・メイジ】は魔法をぶっ放してきた、心なしか怒ってるように感じる、頭にたんこぶできてるし、まあ、こいつら感情がないようなものだから俺の心情がそう見せてるだけだろうが。とりあえず、主にいきなり魔法をぶっ放したりしないだろう。

弱らせないと駄目とか条件があるのだろうか？

とりあえず、弱らせてから【従魔の宝玉】を使ってみるか…。

というわけで、弱らせるために、近づいていって剣を使わずに拳で殴る。

何発か手加減したパンチを入れたらグツタリしてきた。

なんか、酷いことをしている気になってきたが、かまわず【ゴブリン・メイジ】に【従魔の宝玉】を投げつける。

今回も玉は【ゴブリン・メイジ】にぶつかった後ゴトリと地面に落ちた。

グツタリしながらも、いまだに俺に襲い掛かってこようとしているから、僕にはな<sup>しもへ</sup>ってないと思う。

やけになつてグリグリと玉を押し付けてみたりしたが効果はなかった。

むう、何がいけなかったのだろうか？

【従魔の宝珠】に再度【解析】を使ってみる。

説明をよく確認していくと最後に『ただし、INTが50を超えるモンスターには効果がない』とあった。

…O h u u u

【従魔の宝珠】使えねえ！つてか僕に<sup>しもへ</sup>できる条件満たすの【養殖人間】くらいしかないじゃねえか！

とりあえず、このグツタリしている可哀想な【ゴブリン・メイジ】を倒すことにする。

心情的にはこのまま、見逃してやりたいが、どうせ見逃そうとしても襲い掛かってくるだろうし。

せめて、苦しまないように殺してあげよう…。

少々いたたまれない気持ちになりながらも、剣で斬り倒す。

【ゴブリン・メイジ】を倒した後には、杖と本が置かれていた。

本のタイトルは魔術入門書。

とりあえず、魔法を覚えるという目的は達せそうだが、なんだか身も蓋もないというか。

納得がいけないというか、何だかなあ…。

それと、この【従魔の宝珠】しまっておくか…、【養殖人間】じゃ僕にしても盾の代わりにもなりやしない。

今回はハズレを引いたなあ。

#### 14話目っばい（後書き）

さて、役立たず認定された【従魔の宝珠】ですが、これが後に意外なところで役にたりたりする伏線があったりなかったり。

次回は延々と魔法の説明が入ります。

読み飛ばしても話の筋はつながりますので、飛ばしていただいても問題ないかと。

ちなみに、藤袴はこういう説明は読み飛ばすタイプです。

## 15話目っぽい(前書き)

一日一話のペースが維持できなかった…

これから、更新ペースはちよっと落ちるかもしれないです。すみマ

セヌm ) ————— ( m

## 15話目っぽい

さて、一度拠点に戻ってきまして、魔術入門書を読むこと数時間。

魔法の使い方が、だいたい解ってきた。

なんだか、【魔法才能】が三つ以上のランクの場合、単純に具現化したい現象をイメージするだけでも使えるらしいが、以前に使えなかったのは、イメージの練り込みが足りなかったからみたいだ。

昨日、俺がやったMPを消費して行っ、鍛冶や縫製と原理は一緒だそうで…、あれも三つ以上ランクがないと使えないし、イメージが明確じゃないとうまく練成できなかったしな。

で、【ゴブリン・メイジ】が行っていた杖をフリフリするのと、もによもによ言ってた奴だが。

三つ以上の【魔法才能】がない場合、魔法を使うのに一定の手順が必要になるそうな。

まあ、鍛冶で武器を作るのに、鋼を熱して、ハンマーで叩いて、とかするのと一緒にだな。

んで、その手順というのが、まず魔法の発動体を手に持って印を刻む、これは世界に今から魔法を使いますよー、と合図を送る行為になるそうだ。

合図を送らないと世界がびっくりして、魔法の発動に抵抗してしまいうらしい。



発動体は、杖とか指輪とか色々あるらしい【ゴブリン・メイジ】が使っていたのは杖だな、後、ドロップアイテムの杖が発動体だった。開始する合図の印は、自分がこれは魔法の開始する合図だ！、と認識できればなんでもいいらしい、三拍子を刻むとか、指で円を描くとか。

ただし、印をほいほい替えると認識に齟齬が出て、うまく魔法が使えなくなる可能性があるので、一度決めたら替えないほうがいいらしい。

次に魔力を練りつつ、発動させる魔法のイメージか呪文式を定める、呪文式というのは俺の感覚だとプログラム言語みたいなものかな？

イメージで魔法を使うのは、絵で魔法という現象を表現するのに対して、呪文式を使うのは文章で表現する感じと云えばいいか。

文章は文言さえ覚えてしまえば誰でも寸分違わぬ物ができるけど、絵は描く人によって同じ物のつもりでも違うものができたりしてしまう。

まあ、そんな感じなものと思っていたきたい。

最後に発声をして世界に魔法の発動を告知するらしい、これで魔法が発動するそうだ。

【魔法才能      】を、持っている俺はこの手続きをすつ飛ばせる。

魔力を練りつつ、明確な魔法のイメージを作って発動しろ！と念じ

るか、呪文式だけ魔力にこめて打ち放つだけでもいい。

ただ、手順をすっ飛ばす分、MPは余分にかかるし威力も少なめになっちゃうれしいが。

本によるとイメージで魔法を使うより、呪文式を使うほうが主流らしい、理由はイメージのみだと発動に時間がかかるからのと成功率が低いからだ。

明確なイメージを思い起こすのは訓練しても結構時間がかかる。

それなら最初から呪文式を覚えるほうが手っ取り早い、応用力はイメージの方が上なんだが、呪文式は結構なバリエーションがあるのでわざわざイメージ魔法を使う意味がないそう。

とりあえず、入門書には基本的な魔法の呪文式が載っていたのでコイツを使ってみようと思う。

拠点部屋にある馬鹿でかい庭で試してみることにした。

とりあえず作法に則った、方法で使うことにする。

まずは基礎の基礎、【フレームアロー】

読んで字のごとく、炎<sup>ほのお</sup>で出来た矢が前方に飛んでいくそう。

杖を持って、印はペンタグラムを刻む、魔法といたらこれだろう、んで、呪文式を打ち込んで、発動用の言葉は

「顕現せよ！フレームアロー！」

シンプルイズベストだと思う、長いと大変だし…、魔法名はつい叫んでしまった。

んで、俺の使った【フレイムアロー】はというと…、矢というより槍とかむしろ砲弾？てな感じのものだった。

直径30cm、長さ2mほどある炎の塊が前方に凄いスピードで飛んでった。

次に【ファイアウエポン】

武器に炎の加護を与えダメージを引き上げるそうな、試しに使ってみると剣が燃えた。

刀身が駄目にならないか心配になったが大丈夫みたいだ、不思議だし…。

次は【ヒール】

RPGには定番の回復魔法に相当する、パーティーに必ず一人は使える人を入れときたい魔法。

HPを回復し、傷もちよこつとだけ直すらしい。

使ってみた所、HPが回復し、やけどの痕も治った。

うーん、便利魔法だな。

他にも色々あるみたいが、あとで試そう。

## 16話目っぽい

とりあえず、右手に剣を持ち、左手に杖を持った状態で実践で多用することになるであろう【フレイムアロー】を使ってみる。

杖をフリフリ

「顕現せよ！フレイムアロー！」

杖をフリフリ

「顕現せよ！フレイムアロー！」

杖をフリフリ

「顕現せよ！フレイムアロー！」

3回繰り返す。

うーん、剣を持った状態だと杖が邪魔だな、魔法だけで戦うならいいけど、一人パーティーの俺じゃそれは無理だし、指輪型の発動体を【ゴブリン・メイジ】が落とさないかな？  
とりあえず、【ゴブリン・メイジ】を狩りに11階層に行ってみるか。

ザクザクと【ゴブリン・メイジ】を倒していくと、杖はポコポコ落としてくれるんだが指輪タイプの発動体は落としてくれない。杖と一括りにしてはいるが色んな種類の杖を落としている、だが、やっぱり杖以外の発動体は落としてくれない。ちなみにレアドロップは魔道書のように、いくつか新しい魔道書を落としてくれた、なかには被ってしまった物があるがそれは自販機で売ろうと思う。

本は同じものを持ってても意味がないしなあ。

↓数時間後↓

ついに手持ちの杖の数が百を超えてしまった。

これは【ゴブリン・メイジ】は杖以外落とさないんじゃないかと思う。

ドロップしないなら、作ってしまえばいいじゃない！というわけで杖を改造して、使い勝手のいい魔法の発動体を作ってみるか…。

一旦拠点に戻り、下のおつきな部屋で改造作業をやってみる事にする。

ごそごそと【無限のポーチ】をあさり、改造するのに手ごろな杖を探してみる。

【プラチナムタクト】プラチナ製で見た目は指揮棒にそっくりな魔法の発動体だ、こいつがちょうどいい。

これを、錬金魔法と鍛冶魔法を駆使して形を整えていく。

錬金魔法とか鍛冶魔法とかいうのは何かというと、MPを消費して行うアイテムの生成ことをそう呼ぶらしい。

ここには、鍛冶とかの専用の設備がないし、俺も鍛冶の知識とかがないのでこの何々魔法の類を使わないとアイテムの改造とか出来ないのだ。

設備はそのうち拠点に追加されそうだが…、鍛冶の知識は指南書とかモンスターがドロップしないかな？

おっと話しが逸れた、とにかくかなりのMPを消費しつつも【プラチナムタクト】を改造していく。

形は五芒星の意匠を施したコインにする、魔法の発動体としての機能を残しつつコインの形に形成していく、神経も使うしMPも使うで、これを直接手に持って使うのではなく、手袋の手の甲の部分に埋め込んで使用する事にする。

そうすれば手を塞がずに魔法が使えるし、見た目もアホっぽくなくていい感じだ！一度こういうの着けてみたかったんだよね。

せっかく、ファンタジー世界っぽいところに来たんだから、アホな格好をしてみるのもいい経験だと思う。

どうせだから、手袋も自作してみるか。

というわけで手袋の作成に着手した、まずは手のひら部分と手の甲部分を作ることにする。

防具の【レザージャケット】をばらしてラウムの皮を切り出す、こいつは牛皮に似ていて丈夫で使いやすい。

んでこいつを切り出し縫製したうえに、錬金魔法を使って縫製部分を融合して縫い目をなくし、あまった皮で指を出す部分を作る。

これでオープンフィンガーグローブの出来上がりだ。

錬金術は分解、融合、変質、精製という元々物理的に無茶なことができるので使い勝手がいい。

錬金術の説明については機会があったら話そう…って俺は誰に話しかけてるんだ？

こほんっ！

んで、そのままオープンフィンガーグローブとして使うのもいいのだが俺の前の世界での常識が アウトー！ と叫んでいるので指部分の作成に入る。

アホな格好はセーフだが、オープンフィンガーグローブはアウトという理由が俺にもよくわからないんだけど…、とにかくダメなんだ。指部分は動きを阻害しないように、薄くて柔らかくびったりフィットする素材で作りたい。

防具の中からよさげなアイテムを探す、確か【ゴブリン・ファイター】が落とした防具の中に…、あった【アサシンスーツ】を取り出す、見た目は体にぴったりくっつくレザー製のボンテージだ、絶対装備したくない。

ただし、こいつの間接部分に使われてるのが…シルプの皮だ。柔らかく薄くて丈夫でピッタリフィットする、手袋の指にはびつたしだ。

これも縫い付けた後に錬金魔法を使って縫い目を融合する、MPがゴリゴリ削れているが気にしない。

これで見た目立派な手袋の出来上がりだが、最後に手の甲部分を【ドッグドラゴンの上皮】を使って補強する。

こいつは【ハイドッグドラゴン】のドロップ品だ、凄く丈夫な上に炎に耐性があるらしい。

こいつに、さっき作った発動体を埋め込んで手袋に張っ付け、錬金術を使って下の皮と融合させちゃう。

ちなみに発動体は左手のほうに埋め込んだ、魔法使用中に利き手である右手を空けとくためだ。

完成した手袋を嵌めて、おててをにぎにぎする。

いい感じだ、手の動きを阻害しないし、拳を握ると【ドッグドラゴンの上皮】部分が拳を保護してくれるのでこれで殴つても拳をいためずにすみそうだ。

剣を手にとってみると、グリップ力が増して剣を振るのが楽になった。

このグローブは【マジックグローブ】と名付けよう。

そういえば、自作したアイテムは解析をかけるとどうなるんだろう？  
試しに【マジックグローブ】に解析を掛けてみた。

《【マジックグローブ】魔法の発動体として使えるグローブ、炎に耐性がある》

おお、【マジックグローブ】として認識されている。

しかし、【解析】って一体どういう基準で名前を表示したり効果を説明したりしているのかな？

今まで何気なく使っていたが、これは実験してみる価値があるかも。

とりあえず、今日はもう寝るかMPも九割近く削れたし…、無理に手順すつ飛ばしたりしたからなあ、鍛冶とか縫製の技術書とか専用の工房がほしい所だ。





## 16話目っぽい(後書き)

一話丸まる、手袋を作る話しに…  
いつになったらシロウは迷宮出れるんだか…

## 17話目っぽい

朝起きると、MPは9割程度まで回復していた。  
8時間睡眠で、最大MPの8割が回復したという事は寝ると1時間につき1割程度MPが回復するのだろう。

さて、とりあえず今日は【解析】の効果について調べてみる事にする。

とりあえず、目に付くもの全てに解析を掛けていってみる事にする。  
ドロップアイテムを解析していく…、ジーツ。

解析を掛けていった結果、説明文が出るものと出ないものがあるのがわかった。

基本的に武器は名称以外表示されないことが多い、マジックアイテムは詳しい効果が表示される。

防具とか服は材質とかが説明される、食材も詳しい情報が表示されるものが多い。

ふむう、この違いはなんだろうか？わからん。

次に、拠点にある設備を見て行く。

ガスコンロ…、炎を出すマジックアイテムの一種らしい。

シャワー…、特に情報なし、風呂…特に情報なし、蛇口…、特に情報なし。

ベッド…、特に情報なし、壁とか床…、特に情報なし。

ドア…、空間を跳躍するマジックアイテムの一種らしい、見た目は木製の一般家庭にあるようなドアなんだけどな。

庭に出て、色々見てみる。

地面…、特に情報なし、空…、そもそも対象が特定できない。  
太陽…、「目があ！目があああああ！」

とりあえず情報が出るものとでない物の差は魔法のサムシングであるかそうでないかっぽい。

それだと食材や服に説明がでる理由がわからない、基本的に食材や服の材質で説明が出るものは、前の世界に存在しないものが多かったが、魔法物質ではないと思う。

ラウム肉とかただの肉だし、動物の皮や植物の繊維は魔法物質ではないだろう、たぶん。

どうして説明の出るものにバラつきがあるのだろうか？

そういえば、解析をかけた時、同じものでも情報の内容に違いがあったような…。

ん、よく考えてみると、今まで基本的に俺が知りたいと思った場合のみ、該当する情報が表示されていた気がする。

…という事は、だ…。

ベッドに解析を掛けてみる。

【ベッド】寝るときに使用するもの、食用には適さない  
んむ、説明が出た。

今回はベッドに解析をかけるときに、これはどういったものか？食べられるのか？

といった事を”知りたい”と思って解析を掛けてみた、結果それに対する情報が得られたようだ。

食材や服に関して説明がされることが多かったのは、食い物や服の材質に対しての俺の興味が高かったからだろう。

よし、もう一度”知りたい”と思いつつ、色んなものに解析を掛けてみよう。

まずは、壁とかに掛けてみるか…。

【壁】煉瓦で出来ている、食用には適さない  
いや、別に食べないし、他に情報はないのか？

【壁】煉瓦で出来ている、食用には適さない、煮ても焼いても味はかわらない

いや、食べないんで、味とかどうでもいいです。

んー、得られる情報には限度があるみたいだな、何でもかんでもまるっとお見通しとは行かないみたいだ。

とりあえず色んなものに試してみよう。

色々なものに試してみた結果、やっぱり得られる情報には限度があることが判明した。

それと、この能力、マジックアイテムや使い方がよくわからないアイテム以外に使うのはあんまり意味がなさそうだという事がわかった。

例えば剣に解析を掛けてみた場合、その剣の名称と材質、簡単な使い方ぐらいはわかるが。

その剣の作り方とか、剣技とかがわかるわけではないのだ。

とはいえ便利な能力であることには変わりはない、モンスターの場合ステータスとか見れるしね。

とりあえず、解析についてだいたいの事がわかったので、俺は満足した。

## 18話目っぽい

さてと、解析についてもなんとなくわかったし。

今日も階層をぽんぽんと進む事にしようかな、目指せ一日5階層クリア！

というわけで、11階層のボス部屋までやってきました。

今回のボスは【ロックゴーレム】で【ウッドゴーレム】の上位互換といった感じの奴だ。

ステータスはこんな感じ。

|       |   |   |
|-------|---|---|
| L V   | 1 | 1 |
| H P   | 3 | 6 |
| M P   | 6 | 5 |
| S T   | 1 | 2 |
| S T   | 2 | 4 |
| S T R | 3 | 0 |
| V I T | 2 | 5 |
| D E X | 1 | 1 |
| A G I | 3 | 3 |
| I N T | 6 | 1 |
| R E S | 6 | 2 |

V I Tがかなり高い、代わりにR E Sは低めだ。

ここは魔法の性能を試すところだろう。

まず、慣れていない魔法での実戦なので近づかれないように。

「顕現せよ！アースバインド！」

と、地面から足を動かさなくなる魔法を使う、これでゴーレムは移動出来なくなった。

発動の瞬間に対象の足が地面に着いてないと意味がないし、相手のRESの値によっては抵抗<sup>レジスト</sup>されて効果が出ない場合がある魔法だが、ゴーレムは総じてRESが低いので抵抗<sup>レジスト</sup>される心配がないし、その超重量ゆえにジャンプしてかわすとかもできないので安心して使える。

ついでにこの魔法足がないと効かない、人型で動きが遅くジャンプできないゴーレムにはぴったりの魔法だといえる。

そして、移動の出来なくなった【ロックゴーレム】に遠間<sup>とおま</sup>から攻撃魔法をぶつ放す。

「顕現せよ！フレイムアロー！」

フレイムアローというには些かでかすぎる炎柱が【ロックゴーレム】に直撃し、ゴーレムは粉々になった。

【フレイムアロー】強ええ、ほんとに初級魔法かこれ？

まあ、いいか、次の階層に進もう。

ちなみに今回は能力もレアアイテムも貰えなかった。

今まで貰えたのは、10階層までの初心者サービスだったのかもしれない。

〈10時間後〉

さて、今日はサクサク階層を進め、15階層まで進んで来ました。  
この階層までは特に大したイベントはなかった。

ん、強いて言うなら拠点には施設が色々追加されてことぐらいかな。

庭に離れが出来て鍛冶場とかの工房が追加されたり、一階にでっかい厨房が出来てたり、洗濯機が追加されたり、厨房にでっかい冷蔵庫が置かれたり。

正直、洗濯機は嬉しかった、今まで服は全部手洗いしてたからねえ。  
洗濯機はコインランドリーとかに置いてある縦ドラム式のデッカイ奴だった。

あ、あと14階層で倒した【クリーピングブック】っていう見た目まんま本なモンスターが色んな本を落とした。

ちよつとした物語からファクション雑誌みたいなものに、技術書やら何やら、技術書の類はレアドロップだったな…。

暇なときに読んでおこう、この世界の常識とかわかるかもしれないし。

まあ、ここから出れないと常識を知っても意味がないけどね。

さて、そんなことを考えながら歩いていると、ボス部屋へと到着し



たみたいだ。

まわりは、森なのにボス部屋だけ草が生えてない砂地になっている。まあ、このボスを見ればさもありなんと思う。

ボスは【サンドワーム】というモンスターだった。

たぶん、地面が砂地じゃないと【サンドワーム】さんは身動き取れないんだろう。

どうも地面にもぐって動くタイプみたいだし。

【サンドワーム】の見た目はでっかいミミズの頭部を硬そうな外骨格で覆った感じ？

で、体の半分くらいが砂に埋まっている。

ステータスはこんな感じ。

|       |   |    |
|-------|---|----|
| L V   | 1 | 5  |
| H P   | 3 | 19 |
| M P   | 4 | 5  |
| S T   | 1 | 61 |
| S T R | 2 | 31 |
| V I T | 1 | 49 |
| D E X | 1 | 14 |
| A G I | 6 | 6  |
| I N T | 7 | 1  |
| R E S | 1 | 33 |

氷属性魔法に弱い

近づいて行くと、固そうな頭を振り回して頭突きをかまして来たので距離をとることにする。

距離をとるとジリジリと寄ってくる、移動速度はあんまり速くなさそうだ。

これは、【ロックゴーレム】同様遠距離から魔法を使って倒すのが楽かな？

と思っていたら、【サンドワーム】がいきなり地面に潜った。

潜ったという事は、次に来るのはあれだろう。

はい案の定、足元から強烈な突き上げをしてきた。

ただ、あらかじめ予想をしていたのにまともに攻撃を喰らってしまったのは誤算だった。

HPに50のダメージだ、高レベルじゃなかったら死んでたかも。

俺に強烈な突き上げを食らわした後に【サンドワーム】はまた地面に潜った。

どうやら 潜る 突き上げをする 潜る 突き上げをする を繰り返すつもりようだ。

これはまずいかも。

地下からの不意打ち攻撃はものすごく避けづらい。

そうそうかわす事はできないだろう、しかも潜っている間はこちらから攻撃できないので、必然、突き上げをしてきた所を狙い、相手の攻撃をかわした後にこちら攻撃をあてなければならぬ。

それにさっきの攻撃でHPが1割減っている、10発攻撃をもらったら THE END な計算だ。

10回の間にかわして攻撃をする事をマスター出来るとは思えない。

これは、実戦で使うのは結構不安があるが、あの魔法を使うしかない…。

「顕現せよ！フライト！」

【フライト】魔法は文字通り、空を自在に飛び回る魔法だ。ただ、結構高位の魔法らしく扱いが難しい。

並みの魔法使いでは成功させるのがやっとで、熟練のそれも才能のある魔法使いじゃないと自在に飛びまわるとはいかないらしい。

実際俺もフラフラと浮かび上がるのがやっとで、自在に飛びまわれるとは言えない。

幸い【魔法才能】のおかげか、練習すればうまくなりそうな感触があるが、今はまだ実戦では使えないレベルだ。

まあ、今回は【サンドワーム】から距離を取ればいいので空中に浮かんでさえ居ればそれでいい。

落ちさえしなければな…。

さて【サンドワーム】だが、砂から顔を出して潜るを繰り返している。

俺に攻撃をくわえたいが、こっちが空を飛んでいる所為で攻撃する手段がないようだ。

とりあえず、潜る、顔を出すを繰り返してこちらの様子を伺っているのだろう。

潜る、顔を出す、潜る、顔を出す、潜る、顔を出す、潜る、顔を出す。

しばらく観察をしていた結果、顔を出すタイミングが読めてきたので、それに合わせて魔法を打ち込むことにする。確かこいつは、氷属性の魔法に弱いんだよな…。

よし、こいつを使うか。

「顕現せよ！アイスニードル！」

【サンドワーム】が顔を出したところに、ニードルというにはあまりにも巨大すぎる氷柱を放った。

【サンドワーム】は氷柱が突き刺さりった後、そのまま凍りつき粉々に砕け散った。

粉々になった氷はキラキラと輝き、小さな虹を作り出した。

## 19 話目っぽい

さて、お楽しみの能力ゲットタイムです。

11階層から14階層は能力もアイテムなかったが、15階層は両方ともゲットできるらしい。

まずは能力から、今回のラインナップはこんな感じ。

【MP消費軽減】

【彫金の才能】

【大食い】

なんか、変なのが混じってるんだが…。

思わず取得しそうになってしまったが、ここは【MP消費軽減

】が妥当だろう、これがあれば道具作成の効率も上がるだろうし、魔法って結構使うしな。

【ピロリン、シロウは【MP消費軽減】の能力を手に入れた。】

正直【大食い】にかなり興味あるんだが…、能力は一旦取得しないと効力がわからないからなあ。

大食いはマイナスな面も有りそうだし、取得するのはやめといったほうがいいと判断した。

興味はあるんだが。

ちなみに【MP消費軽減】の効果はMPの消費量を半分にする事だった。  
素敵な能力だ。

で、ゲットしたアイテムなんだが。

#### 【転生の書】

使用するとLV1に戻り、現在のステータスの10分の1が基礎能力に加算される、また、それまでの行動によって転生後に才能が新しく付与されることがある、転生後は現在の肉体年齢以下で6歳以上なら好きな年齢になれる。

#### 【聖剣ハードチップ】

全てを切り裂く聖剣、この剣を使うものは必ず勝利をつかむとされている。

#### 【豊穡のスコップ】

どんな荒れ果てた土地でも豊饒の大地に変えるマジックアイテム、うまく使えば砂漠を森林に変えられます。

皆はこの三つからどれを選ぶ？

俺は【転生の書】を選んだ。

聖剣は名前が微妙だから無しとして【豊穡のスコップ】は惹かれるものがあつたが。

ここは【転生の書】を選ぶだろう、俺は『LV1に戻って基礎能力が上がる』とか聞くとわくわくするタイプだしな。

ドラ エ?には嵌ったなあ、転職システムがいいんだよねえ。

と、いうわけで拠点部屋に入って早速こいつを使ってみることにする、使い方は単純に本を読めばいいらしい。

本を開いて目を走らせる、なんだかよくわからない文字列が並んでいるがかまわず目で追っていく。

しばらく目で文字の羅列を眺めていると、本と自分の体が輝きだした。

そして頭の中に音声が響いてきた。

【転生後の年齢を決定してください】

…そこはシステム的なのかよ！ガクツときちゃうだろ！  
とりあえず、年齢は15歳を指定する、特に意味は無い。

【転生を開始しますよろしいですか？】

<Yes> <No>

<Yes> を選択する。

ポンっ！

と音がした後。

【条件を満たしているので以下の能力が付与されます】

【剣の才能】

【戦士の才能】

【鋼鉄の精神  
はがね】

【孤軍奮闘】

【弱い者虐め】

【転生は無事終了しました】

という、アナウンスっぽいものが流れた。

どうやら、無事に終了したらしい。

なんだか体が小さくなった気がする、ステータスを確認するついでに鏡で見た目を確認しよう。

鏡で自分の姿を確認してみると、ちょっと背が縮んだように見える、34cmくらいは減ったかな？

服も鎧もサイズが合わなくなってる、それほど体が縮んだわけじゃないから、ずり落ちるほどではないけどね。

元が168cmだったから今は164〜165cmって所か…見た目も少し線が細くなって少年ぽくなった。

ふむ、まあ、悪くは無いか…。

あとLv1に戻っているのが確認できた。

現在のステータス

|      |     |
|------|-----|
| NAME | シロウ |
| LV   | 1   |
| HP   | 171 |
| MP   | 208 |
| ST   | 176 |
| STR  | 204 |
| VIT  | 210 |



|     |     |
|-----|-----|
| DEX | 176 |
| AGI | 229 |
| INT | 242 |
| RES | 187 |

うむ、初期能力値がちゃんとあがっているな。

それに新しく手に入れた能力も気になるがどんな感じのものだろうか。

まず【剣の才能】はその名のとおり剣を自在に扱う才能らしい、ひとつだと一流レベル。

因みに【クリーピングブック】からゲットした本に書いてあったんだが、能力のは1個で一流、2個で天才、3個で英雄、4個で人を超えたレベル、5個で神に達するレベルらしい。

人間の限界は3つと言われてるらしい、俺は初期の段階で5つの能力を持っていたが、まあ、そんなことはどうでもいいか。

後、特に【の才能】を持ってなくても、適正がまったく無いかというところではなくて【魔法才能】がなくても努力すれば魔法は使えるらしい。

覚える効率とか威力は才能持ちより落ちるらしいが。

んで、二つ目の【戦士の才能】は戦闘に関する才能らしい、戦闘が得意になるらしい。

【鋼鉄の精神】はがねは強靱な精神力によって全ての精神攻撃に耐性を持つそうだが、魅了とか睡眠攻撃とかに対して抵抗しやすくなるみたい。

【孤軍奮闘】ひとりで困難を克服する力、多数の敵に囲まれたと

きステータスが上昇するそうなので、RPGの能力つばい。

【弱い者虐め】自分よりレベルが低い敵に対して与えるダメージが増加する、判りやすい能力だな。

転生で得た能力は大体こんな感じだった。

とりあえず今日は若干緩くなった服や鎧を手直ししてもう寝るとするか…。

ステータスも下った事だし、明日は一旦したの階層に戻ってどれだけ戦えるか確認しなおすかな？

それとも、魔法の練習でもしようかなあ、意外と魔法を使う機会って多いし、魔法は便利だ。

## 20話目っぽい

とりあえず、11〜15階層でレベル上げをしてたら半日でLV20まで上がった。

ステータス

NAME シロウ

LV 20

HP 207

MP 273

ST 212

STR 249

VIT 242

DEX 222

AGI 280

INT 278

RES 226

以前4階層でレベル上げをしていた時はえらい時間がかかったが、あれは【養殖人間】の経験値的なものが激少だからだったんだろうと思う。

ちなみに本による知識なんだが、レベルってこんな短期間で上がるもんじゃないらしい。

たぶんだけど、この迷宮に経験値取得量を増やす仕掛けとかがあるんじゃないかと思う、検証の仕様が無いので推測しか出来ないが。

まあ、それは置いて。

思ったより成果が上がったので今日の午後は魔法の練習に当てようと思う。

これからは剣だけだと厳しくなってきたし、魔法を多用することになりそうだ。

練習しといて損は無いだろう。

夜、寝る前にちよくちよく読んでいた魔道書に魔法式応用編ってのがあってまずはそれを試してみようと思う。

最初に『応用編威力強化』を試すことにする。

まず、魔法を使うときには魔法式っていう一種のプログラミングを使ってるわけだが、威力強化ってのは単純に各種魔法の魔法式の最後に威力を強化する魔法式を追加する事によって威力を5割増しにすることだそう。

その分消費するMPが倍加するらしいんだが…。  
試しに【フレイムアロー】に使ってみよう。

まず魔法の練習に最適な、拠点にある広い庭にでる。  
そして、標的にいくつか案山子を作って置いておく、簡単に壊れないように【プレートメイル】も着せて…と。

まずは普通に【フレイムアロー】を使ってみる。

直径1cm、長さ1mの炎の矢が標的の案山子に飛んでった。

ドカーン！と標的である案山子に当たり鎧ごと案山子を吹っ飛ばした、鎧着せた意味がねえorz。

ちなみに、前より威力が落ちているのは転生してステータスが下がった所為だ。

次に魔法強化を使ってみる、さっき出したものよりちょっと大きい炎の矢が標的に当たりやっぱり標的を吹っ飛ばした。

うん、ちゃんと威力が上がってるみたいだな、よしよし。

威力強化は重掛けができるので、1・5倍、2・25倍、3・375倍、5倍（計算がめんどいので端数は略）、と威力を増やしている。

その分消費MPが、2倍、4倍、8倍、16倍、と増えていくわけだが…。

とりあえず、4倍掛け試してみるか…。

試しに4倍掛けを使ってみたところ、LV95の時に出したような砲弾みたいなのでつかい【フレイムアロー】が飛んでった、そして鎧付き案山子を蒸発させた。

さらに俺のMPが半分にまで減った。

【フレイムアロー】は初級魔法の癖に、1発あたりMPを12も消費するからな【MP消費軽減】があるから消費MPは半減するが今ので192の半分の96もMPを消費した。

今日はまだまだ魔法を使いたいし【マジックポジション】を使うか。1本10万c r mする【マジックポジション】を10本ほど飲んでMPを回復させる、ちよっとブルジョワジーな気分。栄養ドリンクのような甘ったるい味のする、飲物を10本連続で飲むのはちときつかったが。

さて、次は何を試そうか…。

## 21 話目っぽい

次は魔法の複数化を試してみるか。

こいつは魔法の対象の数を増やす事のできる補助魔法式だ。

例えば通常一本しか放てない【フレイムアロー】もこいつを使えば二本以上同時に放つことができる。

威力強化同様に一本増やすことにMPの消費が倍化するんだが…。

MP消費の事を考えると単純に3回【フレイムアロー】を使ったほうが効率がよさそうだ。

まあ、物は試したこれも使ってみることにしよう。

実験用の【プレートメール】着用の案山子を4体置いて…と。

「顕現せよ！フレイムアロー！」

4本の火矢がそれぞれのよろいかかし鎧案山子に飛んでゆき、4つのよろいかかし鎧案山子を吹き飛ばした。

うん、これは普通に範囲魔法使ったほうが効率が良さそうだ。

範囲魔法の【ファイアストーム】の5倍くらいMP消費してるからな。

味方と敵が混戦状態だけど複数の敵を攻撃したいって時だったら役に立ちそうだけど、俺、一人だし、仲間いないし…。

…よし、次は鎧を着ている時と脱いだ時の魔法の威力の違いを試そう。

本によると、金属と魔法はあまり相性が良くないそうだ、特に鉄は駄目。

鉄製の全身鎧：例えば【プレートメール】なんか着込んでいると魔

法なんか使えるか！って状態になるらしい。

ただ、魔法と相性がいい金属もあって例えば、プラチナ、銀、ミスリル、なんかは相性がいいので魔法の発動体に使われることもあるらしい。

そういえば、俺の発動体はプラチナだったな。

基本的に魔法使いが軽装なのは、こういう理由がだからだそうだが、まあ、後は魔法職を専門にしている連中はSTRが低いから重い鎧が着れないってのもあるらしいが。

能力値の成長はそいつの普段の行動に結構影響されるらしい、剣を振ってる奴はSTRが上がりやすいし、魔法を使ってる奴はINTが上がりやすいとか。

んで、魔法戦士と呼ばれる剣も魔法も使うタイプの戦士はミスリル製の鎧か革製の鎧を使うらしい、ミスリルは高いので革製の鎧を使う奴がほとんどのらしいが。

んで、現在俺は「プレストアーマー」っていう鉄製の鎧を着込んでるわけだが、こいつは胸部しか覆ってないのでそれほど影響は無いと思う。

とりあえず試してみるけどね。

とりあえず、また「マジックポーション」を飲んで…と。

今日一日で200万c r mが飛んでいったな、ちょっと勿体無いか？まあ、いいか金は余ってるしな…。

鎧を脱いで「フレイムアロー」を使ってみる、結果若干威力が上がつて魔力を練る速度も上がったような気がするが、予想通りそれほど影響は無さそうだな。

次に【プレートメール】を着て魔法を使ってみる事にする、この【プレートメール】って鎧は鉄でガチガチに固められた、The knight って感じの鎧だ。

ちよつと動きづらいので、あんまり使わないんだけどね、俺の戦闘スタイルは『当然らなければどうという事はない！』だから、魔法を使ってみたんだが、超使いづれええええ。

魔力を練るのがすごい大変で、練りあげるのに10秒くらいかかった。

しかも威力も下がって、【フレイムアロー】がミニキャロットみたいな大きさのへろへろ矢になってた。

結論【プレートメール】を着込んでの魔法行使は自殺行為だ。

さて、実戦的な魔法の実験&練習はここで一旦置いてだ。ちよつと息抜きを試みようと思う。

ここからは、シロウのちよつと気になる魔法のコーナーの時間だ。

まずは一発目【エンドレスラフ】

この魔法は対象を見えざる手でくすぐるという魔法だ、効果は3分間。

何の役に立つかわからないが使ってみたくてたまらない。

ただ、試す相手がないので自分に使ってみるしかない、迷宮のモンスターに使うのもどうかと思うし。

「顕現せよ！エンドレスラひゃーはっはっはーつつっうひーひゃひゃひゃあへあへうひはーうへへへへー」



（3分後）

「はあはあはあ、ぜえーぜえーぜえー」

こ、この魔法は危険だ、笑い死ぬかと思った。

意識が集中できないから魔法の効果を打ち消す【デイスペルマジック】も使えなかった。

ふうー、今度人型のモンスターに使ってみるか？結構えげつないぞこの魔法。

では、次【ボイスチェンジ】

自分の声を好きに変えられるらしい、効果は10分間。

「顕現せよ！ボイスチェンジ！」

うむ、これで声が変わったはずだ、どんな声に変えたかは秘密だ。

「あー」

おお、完璧だ！完全に某声優さんの声に変わってる。  
ためしになんか言ってみよう。

「うるさいっ！ うるさいっ！ うるさいっ！」

「この変態っ！ ド変態っ！ d e r 変態っ！」

「この犬っ！ エロ犬っ！ スケベ犬っ！」

どう見ても、誰の声に変えたかまるわかりです、本当にありがとうございます。

その後、効力が切れるまでたっぷり堪能した。

この後も、色んな変な魔法を試してみた。

【スピン】物体を回転させる、対象は非生物のみ、効果30分。

【ウォールウォーキング】重力の方向を無視して、足の裏がついてる位置を元にして動ける、効果3分。

【サイドビジョン】自分の左右に自分の幻影を出現させる、効果3分。

【フェイスチェンジ】自分の顔を好きな顔に変化させる、効果10分。

たっぷり面白魔法の効果を試した後は、真面目に魔法の練習をして過ごした。

## 22話目っぽい

まじで、この迷宮何階層まであるんだろう？と考えているシロウです。

あまりにも自分の名前を呼ばれないのでそろそろ名前を忘れそうなシロウです。

あれからさらに数年経って、現在100階層目を攻略中だ。

LV100まで上げた後にもう一回転生して更にLV200まで上げた、見てよこのステータス。

|      |      |
|------|------|
| NAME | シロウ  |
| LV   | 200  |
| HP   | 4050 |
| MP   | 6452 |
| ST   | 4250 |
| STR  | 4856 |
| VIT  | 4355 |
| DEX  | 4857 |
| AGI  | 6053 |
| INT  | 6255 |
| RES  | 4258 |

ちなみに現在の外見年齢は15歳だ。

90階層過ぎたあたりから急にモンスターが強くなってこんぐらいステータスがないときつくなってねえ。

全身オリハルコンで出来た体長30mのドラゴンとかでてくるんだぜ？

もう大変だったよ。

取得した能力については機会があったら説明しよう。  
能力とアイテムのボーナスって20階層を過ぎた所から、10階層  
ことになったんだけどそれでも数があるからな。  
転生で取得したものとかもあるし。

そういえば、能力とアイテムのボーナスは10階層ごとになったんだが、拠点は毎回増築されているみたいで拠点部屋は凄い事になっている。

もはや、俺には何処に何があるのかほとんどわからん。

この前、拠点の庭から【フライト】で飛んで外観を見下ろしてみたんだが、山みたいな超デツカイ城が空飛ぶ巨大な島の上に乗っかってる感じになってた。  
もはや、ラピユ というよりアルビ ン大陸みたいな感じ？  
何気に湖とか森とかあるし。

まあ、その話しは置いて、100階層目を攻略しますか。

とりあえずどう見ても伝説級のモンスター達（無駄にでかい）を薙ぎ倒しながら進んで行く。

このステータスだともはや力技だけで進める、実は前の階層も1時間くらいでクリアした。

一応必殺技とかもあみ出したんだけなあ、強化しすぎたか。

と、そうやって進んでいくと高さ5mくらいの重厚感のある、両開きの扉の前に出た。

材質は石かな？悪魔っぽいものとか天使っぽいもののレリーフが掘られている、ローマとかにありそうな感じ。

そういえば、今まで迷宮に扉ってなかったよなあ。

とりあえずノックしてから入るか、一応礼儀は守るぞ。

コンコン！

「どうぞ」

ええええええええええーっ！何か返事が返って来たー！この迷宮来てから初めて話しかけられたよ。

扉についてる悪魔のレリーフの目が怪しく光って動いているとか、ゴゴゴとかいいながら扉が勝手に開いていく事とかよりコッチのが衝撃的だよ。

とりあえず、扉が開いたので入ってみることにする。

どうぞって言われたしな。

「お邪魔します。」

と入っていくとローマの神殿みたいな厳かなづくりの部屋の中に、金髪のねーちゃんがいた。

なんというか、こう、テンプレートな女神様っていう感じのお人で真っ白なローマ風のドレス、えーと確かトーガってやつだと思うがそれを着てたたずんでいた。

「始めまして、私はこの迷宮の管理者です。」

「かなりшыですか…」

なんか、管理者きたけどどうしよう？不法侵入で訴えられたりしな

いかな？

「私の使命は神に選ばれし勇者に試練を与え、育て、導く事」

そうですかあ、つまり此処は勇者専用テーマパークみたいな物なんですね、わかります。

「よくぞ、ここまでたどり着きましたね、神に選ばれし勇者よ」

「へ？」

へ？

「貴方が此処で得た力を使えば魔王を倒すことが出来ましょう」

ええ？俺が勇者ってこと？それは、ちょっと遠慮したいなあ。

とか、思っていると金髪ねーちゃんが急にこらえきれないというように笑い出した。

「くふふふふ、あーはっはっはっは！、なーんてね、せっかく試練を乗り越えて此処まで来たのに残念だったね、ゆ・う・しゃ・さ・ま？」

あれ？この金髪ねーちゃん急に雰囲気が変わったんですけど、やっぱり訴えられるのか俺？

とか思っていると雰囲気が変わったねーちゃんが、バツ！とその場から飛び退った。

「捕縛しろ！ジェイル・トラップ・ビースト！」

という叫び声を上げたかと思うと、鉄格子つばい物が俺を取り囲んだ。

檻の外からねーちゃんがいやーな感じの笑みを浮かべながら話しかけてきた。

「さて、君はどんな命乞いをするのかな？せいぜい無様なさまを見せて、私を楽しませておくれよ？」

命乞いとかそれ以前に急展開すぎて付いて行けないんだがどうしよう？

というか、神に選ばれたとか勇者とか意味不明すぎて自分の命よりそっちのが気になるわ！

## 23話目っぽい

とはいえ、まずは檻を剣で斬り付けるみるか。

ガーン！

と大きな音がしたが傷一つつかない。

ガンガンガンガンッ！

何度も斬りつけてみたが、まったく効いている様子が無い。

剣が駄目なら魔法だ！とばかりに魔法を連発するもこちらもまったく効いてない。

収束して放つ超強力貫通式【ファイアーアロー】とか放ってるのにノーマージってどういうこと？

オリハルコンドラゴンすら一発で貫き殺す威力とかあるのに。

仕方ないので金髪ねーちゃんを直接攻撃しようとしたが、全部檻に阻まれた。

こいつ、動くぞ？

「無駄無駄無駄だよ？今、君を捕らえてる【ジェイル・トラップ・ビースト】は勇者を捕らえるために作った特別製だ、HP、DEF、RESのみに集中して極限まで強化してあるからねえ、いくら攻撃しても傷一つつけられやしないよ？」

ん、確かに攻撃は無駄っぽいな。



「ふふふ、それより、ようやく試練を乗り越えて魔王を倒しうる力を得たにもかかわらず、志半ばで死ぬ気持ちはどうだい？悔しいかい？ねえ？悔しい？」

「いや、そもそも魔王とか勇者とか何のことだかわからないんだけど…、っていうか迷宮の管理者のあんたって勇者育てるのが仕事なん？」

「????何を言ってるんだい？神の説明を受けているんだろ？この迷宮は神々の張った結界に護られているから、神の許しなく入ってくるなんて不可能のはずさ、とぼけて一般人を装っても無駄だよ？」

…もしかして【結界無効】の所為か？確か 5つだと神に達するレベルらしいし、神の結界を無視して迷い込んだんじゃない？。

「それにしても、神の連中はなんで君なんかを勇者に選んだんだろうねえ？成長限界は10という人類最低レベル、基礎能力値は一般人レベル、おまけに戦闘技能も持ってない、およそ勇者には向かないタイプだと思うんだがねえ？」

それは、たぶん俺が神に選ばれた勇者じゃなくて偶然迷い込んだ一般人だからです。

それと俺のことモニターでもしていたのか？暇なやつだな。

「俺のことモニターしてたのか？暇なやつだな」

声に出しちゃった。

「4階層くらいまでは見ていたよ？そのあと同じ場所から動かなか

「つたから飽きて見るのはやめたけどねえ？」

「しかも答えてくれたよ。」

「まあ、確かに4階層で数十年足踏みしてたからね。」

「だけど、随分と育ったみたいだね？歴代の勇者の中でも最強クラスじゃないかねえ、今までの勇者は君みたいに何十年もかけてレベル上げをしたりしていなかったからねえー、こんなに時間をかけて良かったのかい？ここに来るやつらは皆急いでいたけど、まあどっちみち此処からは生きてでることは出来なかったんだけどねえ」

「時間とかは考えてなかったな、そもそも出られるかもわかんなかったし。」

「君は嫌に冷静で面白くないねえ、そうだねえ、何かおもしろいことを言っておくれよ、気が変わって助けてやるかもしれないよ？」

「と、言われても、俺は芸人じゃないしなあ、まあ、だんまりもあれだし気になった事を聞いてみよう。」

「面白くは無いけど質問がある、何で勇者を殺しまくったん？」

「迷宮の管理者ってのは娯楽が無くてねえ、お高くとまつた勇者様たちの悔しそうな顔を見るぐらいしか面白い事が無くてねえ、それに魔王何さほつといても何とかなるもんさ、別に勇者が倒さなけりゃならないというわけでもないのさ」

「俺の空気読まない発言にもちゃんと答えてくれるんだな、律儀なやつだ。」

「悪趣味だとは思うが納得した」

「ふう、君は面白くないねえ、そろそろ殺してしまおうかね？他の勇者達はいろいろ面白い様を見せてくれたのにねえ」

…うーん、涙と鼻水流しながら命乞いするってのはちょっと考えたけど許してくれなさそうだしなあ。

俺は無駄っぽいことは基本的にしないのよ。

殺されるのは嫌だし、なんか打開策を探してみるかな？

とりあえず、金髪ねーちゃんに解析をかけて見て…と

|     |      |
|-----|------|
| LV  | 100  |
| HP  | 1288 |
| MP  | 1148 |
| ST  | 842  |
| STR | 624  |
| VIT | 852  |
| DEX | 912  |
| AGI | 845  |
| INT | 1333 |
| RES | 1211 |

うーん、こいつ自体はそれほど強くは無いな…。

ん？LVとステータス以外の解析ができないな、俺と同じく解析をレジストする能力でも持っているのか【能力隠蔽】とか…。

まあ、こいつのことはいいか、問題は【ジェイル・トラップ・ビースト】の方だなこいつのステータスは。

|      |                |
|------|----------------|
| NAME | ジェイル・トラップ・ビースト |
| LV   | 1000           |

|     |        |
|-----|--------|
| HP  | 300000 |
| MP  | 30     |
| ST  | 30     |
| STR | 30     |
| VIT | 300000 |
| DEX | 30     |
| AGI | 30     |
| INT | 30     |
| RES | 300000 |

うわあ、LV1000とかDEF、RES、HPが30万とか超無理ゲー。  
 ダメージが通るわけ無いよな…って…あれ？  
 このステータスって…。

「ちょっと質問があるんだけど…答えてくれたら面白いことがあるかもよ？」

って言えば答えてくれそうな気がする、この金髪ねーちゃんおしゃべりだし。

「なんだい、言ってごらん？」

うん、食いついた。

「この迷宮で得られるボーナス能力とアイテムってあんたが決めるの？」

「そんな事が知りたいのかい？まあ、答えてやるけどねえ、あれは迷宮が君の欲しがりそうなアイテムを勝手に用意しているだけさ、

私は関与していないよ?」

なるほどねえ、俺が何を持ってるかまでは知らないって事か…じゃあ。

「これが何か知ってる?」

【無限のポーチ】からあるアイテムを取り出して聞いてみた。

「なんだい、それは? 黒い水晶玉?」

はい! 知らないと見た! 解析を使われる前に即効使います!

「こいつはこう使うんだ!」

俺は黒い水晶玉こと【従魔の宝珠】投げつけた!

囲まれてるのでどこに投げてても【ジェイル・トラップ・ビースト】にあたります。

【従魔の宝珠】は【ジェイル・トラップ・ビースト】にあたった後に粉々に砕け散り、その破片が【ジェイル・トラップ・ビースト】へと吸い込まれていった。

ドクンと心臓がなり、体がぽかぽかしてきた、そして【ジェイル・トラップ・ビースト】と何か見えないものでつながったような感覚を覚えた。

これで【ジェイル・トラップ・ビースト】は俺の僕になったのだから【ゴブリンメイジ】の時と違って今度はちゃんと実感がある。まあ、とりあえず

「そいつを捕縛しろ! ジェイル・トラップ・ビースト!」

と命じた。

【ジェイル・トラップ・ビースト】は俺を解放すると同時に金髪ねーちゃんをその体の中に捕らえた。

「な、な、な」

金髪ねーちゃんは驚いてるようだが俺も驚いている。  
こんなに簡単に形勢逆転できていいんだろうか？

こいつよく今まで勇者を倒してこれたな。

さて、この後どうしようか？

## 24話目っぽい

とりあえず【ジェイル・トラップ・ビースト】の支配権を取り戻されたらたまらないのでINTを上げておく事にする。

迷宮の管理者だし【従魔の宝珠】を作り出すとかできるかもしれないしね。

ほんほう本邦初公開その名も【アホのましになる薬】だ！

こいつを使うと一個でINTが1→3上がる、INTが100以上になると効かなくなるんだが。

こいつを20本ほどブッコむ！

【従魔の宝珠】って簡単に対策が取れるんだよなあ、まあ、金髪ねーちゃんは【従魔の宝珠】の事知らなかったみたいだし、対策とってなかったのはしょうがなかったか？

で、とりあえず対策もとつたしまずやる事と言ったら…。

「ここから出るにはどうしたらいいか教えてくれない？迷宮はそろそろ飽きてきたんだ、今の自分の立場はわかってるよね？」

とりあえず、迷宮を脱出したいのだよ、うん。

「な、私をどうする気だい？」

どうする気も無いな、利用価値がある間は殺したりもする気はないし。

「俺に従っているうちは何もしないよ？まあ、言う事を効かない場合…どうしようかな？」

にたあり　と悪そうに見える笑みを浮かべてみる。

「はっ、ま、まさか、私のことを慰み者にする気じゃ…、私は人間では足元にも及ばない美貌をもっているから…」

そんな事は一言も言っていないしする気も無いんだが…、というか今は出口の話をしてるんだけど…。

とか思っているうちにこの金髪、勝手に盛り上がっていつてるし。

「私を　して　であまつさえ　で　にした  
り、××××を　する気なんだね！」

「いや、俺は出口を聞いて「まさか　に　を　する気  
じゃ!？」」「

「だからでぐ」「××××を　に　まで?この変態!」「

イラッ  
シ

「ジェイルトラップビースト回転しろ」

俺の命令を受けて【ジェイル・トラップ・ビースト】が縦向きに回転を始める。

【ジェイル・トラップ・ビースト】の中にいる金髪ねーちゃんは床が壁に壁が天井にと地震なんか目じゃねーぜといった状態になるわけ。

「や、やめ、何をするんだい!」

といわれてもやめずに、しばらく回転をさせ続けた結果。



「うううう、き、気持ち悪い……」

と、顔を真つ青にしてへばつてきた。

とりあえずこの辺でやめておく、汚いものを見たくもないし…。

「出口を教えてくれるかな？」

「わ、わかった、教えてやるよう、その扉の奥に魔法陣がある、そこから出られるよ」

言われてみると隅っこの方にみずばらしい木製の扉があった、あの扉の奥から出られるのか…、なんかさんざん苦労して最後がああ言うて言うのはどうだろうか？

演出に手え抜きすぎじゃないか？

ま、いつか？

よし、これで迷宮をクリアだ！娑婆に出んどお！

おっと、その前に。

「ジェイルトラップピースト！俺が死んだのを確認したらそいつを殺せ、後、俺がいいというまで何があってもそいつの捕縛を解くなよ！」

これでよし、俺が死んでもこいつが野に放たれることはなくなった。

「ちょ、ちょっと待ちなよ、このまま私を放置して行く気かい？」

たまに帰ってくるかも知れないけど基本放置だな、相手するの面倒くさいし。

というか殺される事より放置の方を気にするのか？寂しがりやかこ

いつは？

「ん？じゃあ俺が放置したくなるようにしてみたら？」訳：なんかいいものよこせ

「な、やっぱり私の体が目当てか…仕方ない私の体を好きにして」「いえ、そういうのはいらないんで」「って、なんでさ、まさかホモなのかい？」

「ちげーよ！」

ホモじゃないけど寝首を掻いてくるであろう女を抱けるほど度胸も性欲もないですよ？

美人なのは認めるけどそれに命を賭けるのはねえ？  
とりあえず

「そういうんじゃないで、こう、俺が迷宮に帰ってきたくなるような便利アイテムとか持ってないの？」

「じゃあ、コレを渡してやるよ、予めこの部屋を記憶してある」

金髪ねーちゃんはクレジットカードみたいな物を差し出してきた。  
見た目は変な文様の刻まれた鉄製のカードだ。

解析を掛けてみる。

【二点転移のカード】使用すると今の場所をカードに記憶して前に記憶した場所に転移する。

二つの場所を行ったりきたりする事ができるので二点転移のカードという。

だそうな。

「…これは、また便利そうなアイテムだな…それを使ったらそこから出れるんじゃないか？」

「今ここで使ってもジェイルトラップビーストごと移動するだけさ、脱出はできないんだよ」

「じゃあ、試しに使ってみてくれないか？転移先が溶岩とか壁の中とかに設定されてたら嫌だしな」

「ずいぶん慎重だねえ、君が死んだら私は殺されるんだよ？そんな事はしないよ？」

用心に越した事はないと思う。

金髪ねーちゃんがカードを使うとちよこつと右に動いた場所に【ジェイル・トラップ・ビースト】ごと転移した。  
どうやら、嘘は言っていないようだ。

「カードを投げて寄越せ」

【ジェイル・トラップ・ビースト】にカードだけ通すように命令し、  
ピッ！ と金髪ねーちゃんが投げてきたカードをキャッチする。

「それにしても、あんた、急に落ち着いてきたな一体どうしたんだ？」

さっきまでと言動が変わって来たような。

「よく考えたらもともとこの迷宮に囚われているようなもんだし、待遇はそんな変わらないような気がするしねえ、それにもう十分長

く生きているし死ぬのは怖くないよ、退屈よりもね」

こいつは寂しかったのかもしれないな。

とはいえ同情はできないな、こいつは勇者達を自分の快樂のためだけに殺しているわけだしな。

こいつを許すという選択肢を俺が取る事はない。

とりあえず行くとするか…。

俺はみすばらしい扉を開け魔法陣に乗り迷宮を脱出した。

脱出した後に気づいたんだが、この魔法陣がトラップって可能性もあつたよな？

それは置いといて！

青い空、白い雲！

シャバだ！シャバに出たぞー！

確か近くに町があつたよな！まずはそこに行くぞー！

## 24話目っぽい(後書き)

迷宮探索編終了！

次回から地方都市マロニー編へ突入だ！

金髪ねーちゃんは放置だ！

## 1話目っばい 町に行こう！

さてさて、もう数十年も前になる記憶を頼りに町のあった場所に来て見た。

大分様変わりしてるが、たぶん此処が以前の町なんだろう。

まず、目に付く大きな変化は高さ10mほどの石造りの壁でぐるーっと町を取り囲んでいるところかな？

あと、町にへと続く道に行列が出来ているところか…。

なんだか、門のところで検問のような事をしているみたいだ。前はこんなこととしてなかったんだけどな？

というか、そもそも町が壁で仕切られてなかったし。

とりあえず、俺も行列に並ぶとするか。

しばらく並んでいると、俺の順番がきた。

どうやら通行税的なものを払わされる様だ。

後ろから観察していた結果、通貨は俺の持っているものと変わらないようだというのが解った。

こいつは助かるな。

まあ、通貨が違かったら別の場所から壁を登って不法侵入するつもりだったけど。

ちなみに俺の所持金は10京CRMくらいだったりする。

全部放出したらものすごいインフレが起きるな、そんな事はしないけど。

前の人と同じく通行税を払って通り過ぎようとしたところを門番のおっちゃんに呼び止められた。  
なんか、ジロジロ見られている。

「ふーむ、黒い髪にこげ茶の瞳、そしてその肌の色…、ここらあたりでは見ない風貌だな…、お前何処の出だ？」

「え？」

何処の出だと言われたら俺は日本人でえーと、なんて答えたらいいんだ？

「何処から来たのか言えばいい、まさか自分が何処から来たのか答えられないわけあるまい？」

えーと、日本と言ったら東だよな、まあいいやここはとりあえず東の方の出身だという事にしよう！

「と、東方の出身です」

と、答えたところ、門番のおっちゃんの表情がさらに厳しくなつた。  
あれ？俺なんかやつちやつた？

「東だど！？ここから東は魔族の領域だぞ！？お前、まさか魔族の間者か！？」

なっ、なぬー！こ、これはどうしよう？

一旦逃げるか？でも顔を覚えられてるしな【パラライズ・ミスト】  
を使って麻痺させてから【トランス・ファイア】で記憶を飛ばすか？

いや、目撃者がこんだけいるとそれも難しいか？

とか、考えていると一人の大男が割って入ってきた。

身長は190cmくらい、がっしりした体躯で赤毛の髪は短く刈り込んでいる。

顔立ちはなんとなく愛嬌があり、体躯の割りに威圧感を感じさせない。

「まあまあまあ、門番さん落ち着いて、彼は僕と同じ南方のシャムセイの出身なんすよ」

といいつつ スッ と門番に何かを握らせる。

そして、こちらにウイंकをしてきた、助けてくれるのか？  
とりあえず、ここは乗っとくか。

「そ、そうなんですシャムセイ出身です、いやー俺って方向音痴なもんでシャムセイから西に歩いているつもりで北に來ちゃいましたよ」

たはは、と笑って誤魔化してみる、これでいけるだろうか？  
すると門番は手に握っているものを確認した後。

「うむ、間違えたのなら仕方ないな、お前達！通っていいぞ！」

と、通してくれた、どうやらごまかせたらしい。

俺はそのまま赤髪の大男と連れだって街中へと入っていった。



## 1 話目っばい 町に行こう！（後書き）

### 魔法の説明

#### 【パラライズ・ミスト】

吸い込むと麻痺する霧を発生させる魔法。

#### 【トランス・ファイア】

炎の揺らめきを見せる事によって対象を催眠状態に陥らせる魔法。

## 2話目っぽい 赤髪の男

とりあえず、お礼を言おう

「さっきは助けってくれてありがとう、本当に助かった」

これに対して赤髪の男は

「どういたしまして、お礼はあそこの酒場でご飯をおごってくれ  
ばいいよ」

と、指で酒場をしめす、結構ちゃっかりしてる奴だ。

俺を助けるために賄賂まで使ってくれたみたいだし、おごるくらい  
全然いいんだけど…。

とりあえず、酒場に入ってテーブルに座る。

この酒場は一階がホールになっていて二階部分に個室があるみたい  
だ。

なんだか冒険者の酒場ってかんじだ、ホールの部分は二階まで吹き  
抜けになっている。

客層はいわゆる一般人が多いが鎧を着けてる奴とか冒険者っぽい人  
間もちろほら見かけられる。

テーブルに腰掛けてると、ウェイトレス風味の女の子がメニューを  
持って来た。

どうやらここは先払いらしい、お金を受け取ってから料理をするそ  
うな。

とりあえず感謝の意味もこめてメニューの中から高級そうなもの  
を選んでいく。

酒はいるか聞いてみたが、いらな*い*といわれたのでジュースを頼む。ジュース一杯1000CRMって結構高いな、果物は高級品なのだろうか？

注文した品が来たので軽く乾杯をして食べる事にする、高いだけあってうまい。

特にナッツを使ったサラダと、お肉がとろつとろになるまで煮込まれたシチューがいただける。

「そういえば自己紹介がまだだったね、僕はロツク、ロツク」クラッタっていうんだ、よろしく」

「俺はシロウ、シロウ」キサラギだ」

「ああ、やっぱりその独特な名前はカグツチの人だね？」

「え？」

カグツチってというのは地名か？察するに日本によく似た文化形態を持つ国のようだけど…。

「うん、僕は以前、海上都市フローティアにいた事もあるんだ、あそこは海上貿易の拠点だから色々な国の人と交流があつてね、カグツチからも交易に来ている人がいたから君の国のことはいくらか知ってるよ」

「へー」

俺はカグツチのことはまったく知らないが、俺の故郷は日本だしな！

「確かにカグツチは東の方に行つたところにあるらしいっすけど、この人にとつて東といったら魔族の領域の事を指すからうかつな事は言わないほうがいいよ、特に今はディフェンスライン砦を抜かれてピリピリしてるから」

なんというか、気になるフレーズがいくつも出てきたがここは合えてスルーしよう、カグツチとか超気になるが…後で調べてみるか。

「ありがとう気をつけるよ、それにしても何で俺を助けてくれたんだ？」

「ん？んー、カグツチ人は義理堅いつて言つし助けておいたら将来得になるかなあなんて思つたんすけど」

「そ、そうか」

そついう事は本人に言わないほうがいいと思うんだが…。

「後はその装備のせいかな？」

「装備？」

「ミスリル製のプレストアーマーに、そのジャケット竜皮を使つてるッスよね？派手ではないけど所々に装飾が入ってるし、よく見ると超高級品だとわかるッス、これはもうお近づきになるしかないと思つたんすよ！」

な、なるほど、そついえば何気に俺の装備つてめちやくちや高級素材を使っているんだよな。

装備の事は考えてなかったな、気をつけないといけないなあ。

まあ、そのおかげで助かったんだし結果オーライか。

ムシャリムシャリとサラダを食べつつロックが話しを続けていく。

「ところで君は何しにこの町に来たんだい？見たところ冒険者のようだけど」

迷宮を脱出したので近くの町に来たっていうと問題ありそうだな。  
うーん、理由ねえ？

「当てもなくフラフラとかな？とりあえずモンスター退治とか仕事があれば適当にこなすつもりだったけど」

「そうっすか、この辺は今や最前線で冒険者の仕事には事欠かないと思うしいんじゃないかな？」

「そういうロックは何しに来たんだい？同業者のように見えるけど」

ロックも見た感じは冒険者か傭兵に見える。

プレートメイルに身を包んだ筋肉質で大柄な体で実は商人なんですとかはないと思うけど。

たぶん傭兵かな？戦功上げて騎士に取り立ててもらうとかそんな感じだろうか？

「何しに来たっていうか僕はここの住人なんだけど、まあ来たのはつい最近なんだけどね、実は僕は商人「ダウトーリーっ！」なんスかいきなり？」

「その体格と装備で商人はないでしょうよ、どう見ても傭兵か冒険者だよな？」

「いや、確かに副業で冒険者をやったツスけど、僕はれっきとした商人だよ？」

「まじで？」

「まじまじツスよ、この町にいい商店の出物があつたんで買ったんだ、これで僕も一国一城のあるじだーっ！って感じで」

「へー」

「そうだっ！特に宿とか決まってるなら僕の店に来ないかい？部屋は余ってるから一部屋貸すツスよ、もちろんお金なんかとらないツス」

「えっ、いいのかい？」

「お安い御用ツスよ、（ぼそっ…あそこは一人で寝泊りすると危険だから護衛を雇うつもりだったんだよね）」

「へ、何か言った？」

「いやいや、何も？善は急げというしご飯を食べ終わったら早速案内するよ（ぼそっ…よし、タダで護衛ゲットだ）」

というわけでご飯を食べ終わった後にロックに連れられ店に行く事になった。

## 2話目っばい 赤髪の男（後書き）

現在のシロウの装備

### 【小烏丸こがらすまるレプリカ】

小烏丸という刀を真似して作った刀、刃渡り75cm、刀身をオリハルコンで作ってあるので本物よりも強力。  
シロウの手作り

### 【ブラックドラゴンジャケット】

ブラックドラゴンの皮を使って作ったジャケットで毒と炎に強い耐性がある。  
ボタンや装飾部分にはブラックドラゴンの牙やウロコを使っていておしゅれ、下手な鎧より防御力がある。  
シロウの手作り

### 【ミスリルブレストアーマー】

ミスリル製のブレストアーマー何気にオリハルコンを装飾に使っている。  
ロックはオリハルコンを見たことが無かったのでそこまでは気づかなかった。  
シロウの手作り。

### 【マジックグローブ】

魔法の発動体として使えるグローブ、炎に耐性がある。  
シロウの手作り

### 【黄金蜘蛛おうごんぐも系の服】

黄金蜘蛛という蜘蛛の糸から作られた服、ものすごく軽い上に丈夫

でしかも肌触りがいい。

本来は金色に輝く色をしているが、シロウは黒く染めて使っている。  
シロウの手作り

### 【ジーパン】

名前の通りのジーパン、内側に黄金蜘蛛糸製の布を張って肌触りをよくしている。

シロウの手作り



### 3 話目っばい 廃墟商店

さて、ロックに連れられてお店に向かつてるわけだが：だんだん周りが寂れてきたというか雰囲気がよくないというか、瓦礫の山が見えるというか、なんかスラムっばいというか、廃墟と化しているというか。

「ロック？なんだか回りに瓦礫の山が見えたりするんだが？」

「はっはっは」

「っていうか、ここスラム街だよね？」

「はっはっは」

こいつ、笑ってごまかすつもりだ！

とはいえ、強く突っ込むのもどうかと思うし、しょうがないのでついていく事にする。

しばらく歩いていると、とある場所でロックが立ち止まり。

「さあ、ここが僕の城クラータ商店っすよ」

といつてきた。

目の前には看板だけはやけに立派な店というか、廃墟があつた。

「廃墟じゃねーか！」

「はっはっは」

「はっはっは じゃねー！」

「まあまあ、そういわずに住めば都というし、入ってみれば案外悪くないかもよ？」

「いやでも、窓は全部ガラスがはまってないし、少し崩れかけてるし、これはないだろー。」

「商店として成り立ってないよね？」

「とりあえず中に入ってよ」

と、ロックは俺の抗議の視線をもともせず強引に中へと連れ込んだ。

意外と中は綺麗にかたずいている。

「というか、何も無い。」

「商店というのに商品が一切無いのは問題ないのだろうか？」

「ロック、商品が何も無いようだけど？」

「商品はこれから来る予定なんスよ」

「そうなのか？」

「うん、そうなんだよ、といえど商品が来るまで僕はここで掃除でもしているつもりだけど、暇だったら店内を好きに見て回っていいよ、今晚の寝床の確保も必要だと思うしね」

ふむ、確かにこの建物の様子だと今のうちに夜寝る場所を確保していたほうがよさそうだな。

というわけで店内を見て周り、よさそうな場所を探す事にする。

まずは今いる商業スペースだが、見た感じコンビニとカフェを足して2で割ったような感じになっている。

真ん中辺に俺の胸元あたりまでの高さの陳列棚がならんでいて、端っこにテーブルがいくつか置いてある。

陳列棚の高さが低いのはカウンターから店内を見渡せるようにするための配慮だろう。

ここは俺の知ってるコンビニと違って監視カメラとか無いわけだしな…、まあ、似たような魔道具はあるかもしれないけど、魔道具は総じて高級品だしねえ。

さらに店舗部分は二階まで吹き抜けになっているようだ。基本的な構造はさっきの酒場に似ているような気がする。

同じ人が設計したのかもしれない。

続いてカウンターの中をしてみる。

スペース的にはかなり広い、コンビニのカウンターの3倍くらいは広いと思う。

2〜3人くらいなら余裕で動き回れそうだ。

たぶん此处では調理もできるようになっているんだろう、カフェーのようなスペースで食べる飲食物を作るためのスペースだと思う。調理器具の類は置いてないが、流し台とかあるから間違いないだろう。

カウンターに入っていくと奥の方に扉が見える。

どうやらここから居住スペースに行けるようだ、とりあえずロックに許可はもらっている中で中に入ってみることにする。

居住スペースを見て回った結果、商業スペースより居住スペースのほうがかなり広い事がわかった。

全体の構造としては、この店は二階建てで地下室がある。

見た感じ地下室は商品などをしまふ倉庫として使っっぽい。

一階はリビングにキッチン、風呂に洗い場と部屋が二つあった。

風呂は薪で暖めるタイプだ。

迷宮の時のように蛇口からお湯が出るということは無いようだ。

水は井戸から汲んでこないといけなさそうだ。

面倒だし風呂とか改造したいなあ。

二階は12畳ほどの部屋が8つもあった。

ドアが店舗側と居住側の両方についているのでこの部屋を通って店舗スペースと居住スペースを行き来できる。

もしかしたら宿屋として使われてたのかもしれない。

…いや、寧ろ、この構造は娼館っぽい気がする、まあ、深く考えるのはよそう。

んで、居住スペースから外に出てみるとそこには結構大きな庭があった。

赤茶けた土にちよぼちよぼ雑草が生えている。

普通に畑として使えそうだ、家庭菜園なんかしてもいいかもしれない、ロックの許可は要るだろうが。

庭の片隅にはちっさい小屋が建っている。

入ってみるとトイレだった、しかもボットン便所だ。

後で水洗トイレに改造してしまおう。

とりあえず、一通り見て回ったのでロックのところに戻るとしよう。

「ロッカー、とりあえず2階の部屋を貸してくれー」

といいつつ店舗スペースに戻してみるとロックはまだ掃除をしていた。

「うん、どうぞどうぞ、好きに使ってくれていいよ」

と、一旦、掃除の手をとめて答えてくれる。

「それにしても、家具とか生活用品がまったく無かったけど今までどうやって暮らしてたんだ？」

「今までは宿を取っていたんすよ、でも今日から商品とかと一緒に生活用品が届くから、こっちに生活拠点を移す事にしたんだ」

「もしかして俺に家具の配置を手伝わせようしてる？」

「うん、手伝ってくれると嬉しいかな？ ボソツ（メインはそっちじゃないんだけどね）」

「まあ、手伝うのはいいんだけど、商品は何時来るの？」

「えーと、確か、もうそろそろ来る頃合だと思っただけど…、おっ、来た見たいっすね」

と、ロックの視線の先を見てみると何かがものすごいスピードでこちらに向かってきている。

それも、土ぼこりを上げつつ、ドドドドつと凄い音をたてながら。

キキーツ と急ブレーキをかけながら一人の少女が目の前に止まった。

「お待たせしたっすう、トムキャット配達サービスっすう」

…語尾がロックと被ってる。

シヨートカットの藍色の髪にくりくりとした大きな瞳、なんとなく猫っぽい、それも人懐っこいアメリカンシヨートヘアーを彷彿とさせる。

服装はＴシャツ短パン、ハイニーソでシヨルダーバックを引っさげている。

語尾は変だがすごい美少女だと思う。

「クラータ商店さんで間違いないっすか？」

「うん、待っていたよ、商品は何処かな？見たところ鞆ひとつで来たようだけど」

「商品ならここにあるっす、今だすっすう！」

とシヨルダーバッグから色んなものを出してくる。

箆笥やらベッドやら調理器具のほかには商品だとおもわれる剣とか鎧とか。

「おおー！もしかしてそれ、無限の収納バッグっすか？いいなあー」

「惜しいっすう、これはアイテムが百個まで入る１００限の収納バッグっすう」

「それでもレアアイテムじゃないか、僕もほしいとは思ってるんだけど収納バッグ系のマジックアイテムって高いんだよね、しかもなかなか売ってないし」

「収納バッグは冒険者や商人にとっては垂涎のアイテムっすからねえ、出物があつてもすぐ売れちゃうみたいっすう、オイラのバッグは会社の備品っすけど、うちの社長も手に入れるのは苦労したつて言つてたっすう、あ、品物の確認が終わつたらサインをお願いするっすう」

ロックが品物の確認した後には少女の出してきた紙にサインをする。  
少女はサインを受け取つた後に。

「それでは、またのご利用お待ちしておりますっすう」

と言つて一礼し、来た道をさつきと同じように物凄いスピードで走つていった。

その後、俺はロックと一緒に家具や商品を店に運び込んだ。  
商品はとりあえず、倉庫にしまつておいた。

家具の配置などをしていたら外はすっかり暗くなつていた。

### 3話目っぽい 廃墟商店（後書き）

宅配サービスの少女の口調をサイコロで決めた結果こんな感じになりました。



#### 4話目っぽい アウトロー

さて、日も落ちてきたし腹も減ったので晩飯にしようという事で、ロツクが簡単な料理を作ってくれた。

ニンニクと玉ねぎと挽き肉を鍋でいためてそのまま水を入れて煮込む。

そこに白ワインをくわえて、適当に切った野菜をぶっこみ、塩と胡椒で味を整えればできあがり。

かなり大雑把なスープだが飲んでみた感じ、味は悪くなかった。

パンは初めてダンジョンで口にした固いパンそっくりの物だったが、スープに浸せば柔らかくなり、そこそこおいしく食えた。

食事をしながらロツクは何でこんなところに店をだしたのか、経緯を話してくれた。

なんでも、この一角は魔族の襲撃を受けた所為でスラム化してしまっただけらしい。

ディフェンスラインが魔族に抜かれた後に急ピッチで町の外に城壁が作られたが、なにせ急な作業だった所為か一部壁のもろい場所があった。

それがこの一角の壁で、運悪く、魔族の軍勢に攻撃され町の中まで侵入されてしまった。

それによりこの区画は蹂躪され、なんとか撃退したものの町は半壊状態、しかも魔族の襲撃に備えなければならず復興を後回しにした結果、今に至ると…。

んで、ロツクの商店は再開発の第一歩となる予定だそうだし、店舗や商業権を安く譲る代わりに町に活気を戻してね、という事らしい。

「おかげでこの齡で店を持てたわけだし、僕にとってはラッキーだったけどね」

「へえー、…ん？もしかして、ここって治安悪い？夜に襲撃受けたりして？」

「はっはっは、さあ、おなかも一杯になったことだしそろそろ寝ようか！」

「ご・ま・か・す・な！聞いてないぞそんな話し！」

「大丈夫スよ、何かあったらすぐ起こしに行くから！ああ、武器はすぐに手に取れる場所に置いていてね？」

「襲撃されるの前提じゃないか！」

とりあえず抗議を試みたが、なんだかんだと言いくるめられて部屋へと追いやられてしまった。

今から宿を取りに行くなんて無理だろうし仕方ないか…orz

とりあえず、部屋は好きに使っていいといわれてるので、【無限のポーチ】からベッドや筆筒を出し、窓には錬金術を使ってガラスを嵌める。

ロックが用意してくれた寝具は【無限のポーチ】にしまっておく、俺の手持ちの寝具のほうが寝心地いいからなあ。

やっぱ、ベッドのマットレスにはスプリングが入ってないと。

よし、今日はもう寝るか！

夜中に叩き起こされるような気がするけどな！

コンコンッコンコンッ

扉を叩く音が聞こえる。

うん、予想通り来たか…。

とりあえず、ベッドから這い出す。

がちやつと扉を開けるとそこには完全武装のロックがいた。

「こんな夜中になんの用だい？」

「いやあー、どうやらお客さんが来た見たいなんスよねー」

お金を払わずに商品を持っていく客が来たわけですね、わかります。

「数は？」

「探知トラップに引つかかったのは5人だね、裏庭から侵入してきたみたいだよ」

とりあえず階段を下りて、ロックと二人で勝手口に行き外をうかがってみる。

真っ暗で何も見えない。

【盗賊の才能】のおかげで夜目は利くほうだがさすがに真っ暗だと何も見えん。

「ロック、ライトボールを使っけどいいかい？」

「それは助かるよ、よろしく」

【ライトボール】とは文字通り光る玉を出す魔法だ。

こいつを2、3個出して【フロート】の魔法を使って空に浮かべる。

【フロート】は対象物を空に浮かべる魔法だ、生物にもかかる。とりあえずこれで大分明るくなった。

物陰に5人程隠れているのが見える。

イキナリ明るくなって動揺しているようだ。

レベルは下から順に、14、15、16、17、18、だ。  
大して強くない。

それに対してこちらの戦力は…

|         |       |
|---------|-------|
| N A M E | ロ ッ ク |
| L V     | 4 1   |
| H P     | 3 7 6 |
| M P     | 1 9 3 |
| S T     | 3 1 5 |
| S T R   | 3 7 5 |
| V I T   | 4 9 7 |
| D E X   | 1 5 4 |
| A G I   | 1 3 1 |
| I N T   | 1 9 6 |
| R E S   | 1 9 3 |

ゴーレムみたいなステータスをしている。

門番とか衛兵の平均LVが25だったからロックはかなり強いと思う。

ステータスも全体的に高いし。

とりあえず、今夜のお客さんを相手にするなら余裕だろう。

「「じゃあ、侵入者の排除はよろしく」」

被った。

「ちよつ、俺、今、ライトボールを使って活躍したじゃないか、今度はロックの出番でしょ？」

「僕は店主として店を守らないといけない、だから店で待機をするよ、お客さんの相手は君に頼むっス」

「店を守るなら外の侵入者を倒しなよ、それとお客さんの相手は店主の役目でしょ」

「僕は最後の砦なんスよ、だから今夜のお客は君に任すよ、何事も経験だレッツトライ！」

「レッツトライ！じゃねえー！俺、今、鎧を着てないんだよ、行けよ、フル装備！」

「なら、なおさら大事な店を任すわけにはいかないスよ」

くうく、ああいえばこういう。  
面倒くさがりやがってー。

はあ、面倒くさいけどしょうがないか。  
いっちよやったるか！

一宿一飯の恩義もあるしな！

侵入者は警戒しながらも一塊になって歩いてくる。

一塊になっているなら、【パラライズ・ミスト】で一網打尽だな。

「顕現せよ！パラライズミスト！」

と、魔法を使うと、なんだかぴりぴりしてるような霧が　もわんと侵入者達の前に広がった。

そのまま霧を吸い込んでしまった侵入者達は一人残らず麻痺ってダウンしてしまった。

せめて散開していればねえ！。

「おー、凄いいじゃないっすか、とりあえず縛って一階の部屋に入れて明日衛兵につきだそう」

どこからか、ロープを取り出したロックと共に麻痺した奴等を縛っていく。

ほつとくと麻痺は解除されちゃうからね。

縛った五人組はよく見ると10代の少年達だった。

魔族の襲撃を受けた時に親を失い、食い詰めてこんな事をするようになったのかねえ、嫌な話だ。

「そっぴや、衛兵に突き出した後ってこいつらどうなるの？」

「たぶん下水道工事とか、キツイ汚い危険が三拍子そろった作業を強制的にやらされることになると思う、しばらく娑婆には出てこれないよ」

なるほどねえ、この世界技術レベルは低そうだし下水道工事とかって命がけの仕事になるんだろうなあ。

とりあえず、縛ったやつ等は一階のロックの隣の部屋に放りこんで

【スリープ・クラウド】の魔法を使って眠ってもらった。  
うるさくされるとうざいしね。

その日は再度侵入してくる者はいなかった。

#### 4話目っばい アウトロー（後書き）

なんだかうまく話しがまとまらず更新まで間が空いてしまいました。  
次の投稿も時間がかかりそうです。

楽しませてくれる方には申し訳ないですm（|（m



## 5 話目っばい やられたらやり返す

「ロック！一晩考えたんだけど、捕まえた5人組を衛兵に引き渡すのやめようぜ！」

「いきなり、何いつてんスカ？」

「このまま、こいつらを衛兵に引き渡すよりいい使い道があるのだよ」

「具体的に言っと？」

「あいつらにこの辺を支配しているボスの居場所を吐かせて、ボスを襲撃、後は懐柔するなり、脅すなりして店に手を出させないようにする、毎晩襲撃されたらたまらないからなあ」

「そんなにうまく行くっスカねえ？」

「とりあえずやってみようよ」

というわけで、昨日捕まえた5人組の前にやって来た。

「今日は君達にナイスな提案を持ってきた！協力してくれたら解放してあげるよ！なに、難しいことじゃない、俺らは君達の持っている情報が少しほしいだけだ」

と言ってみたところ。

捕虜の一人、リーダー格のLV18の奴がこちらを訝しげに見ながら答えた。

「本当に解放していただけるんでやすか？」

「嘘は言わないよ？」

「解放していただけるなら、あつしらに解る事ならいくらでも話しやすいが…」

と、いうわけで尋問？はスムーズに進んだ。

さて、聞いた話をまとめると彼らはカフタスというこのスラム街では一番の勢力を持つ不良集団の一員だそうだ。

構成員は300人程、ボスの名前はカフタス、要はカフタスと言う奴の作ったグループという事だな。

不良集団はこのスラムにカフタス以外にも10グループ以上あつて各地域に縄張りを持っている。

収入源は窃盗、売春、拾ったゴミの中から使えそうな物を売る。

比較的中心街に近いこの場所は実入りがいらしく、不良集団の中でも最大勢力が縄張りを持つ事になったらしい。

5人組はカフタスグループの中では下っ端で斥候代わりに此処へ派遣されたらしい。

普段はゴミを拾って売るくらいしかしてないので荒事は苦手だし、襲撃がうまくいってもどうせ上がりは取りあげられるから様子だけみてさっさと帰る予定だったそうなの。

でもあつさり見つかって、俺の【ライトボール】で照らされて慌てているところをパラミスで一網打尽にされてしまったというわけだ。

最後に襲撃をかますからボスの居場所を教えろといった所。

「あつしらは所詮下っ端、使い捨てにされるゴミでさあ、今までに受けてきた仕打ちを考えりゃあボスに対する義理もございやせん、よござんす、あつしらがアジトまで案内しまさあ」

というわけで、アジトまで案内してもらえることになった。

さて、不良集団のアジトを襲撃するにあたって気をつけなければならない事がある。

それは極力、人死にを出さない事だ。

というのも、俺らの目的はうちの店に手を出すな！という交渉をする事であって彼らの殲滅が目的ではないからだ。

脅しをかけるが殲滅はしない。

彼らを殲滅しても別のところから不良集団が流れてくるだけだからね。

グループカフタスにはこの地域を維持してもらわないと困る。

ロツクは冒険者として荒事にも慣れてるし、手加減して攻撃するのも問題ないそうだが、俺のほうは迷宮で見敵必殺で戦ってたんで手加減なんて器用な真似はできない。

パラミス主体で戦うつもりだが、ステータスが高すぎるんで近づいてきた敵を咄嗟に殴って殺しちゃうとか普通にありそうだ。

という訳で、秘密兵器その1とその2を使う事にする。

まずは秘密兵器その1【リビング・ブルーム】日本語にすると生きてるほうきってところか。

これは某人気RPGのアイテムを参考に俺が作ったオリジナルアイテムで、言うなればほうきの形をしたゴーレムだ。

作り方は【ウッド・ゴーレム】を作成するときに使う【魔法樹の木片】を使ってほうきを作り、それに【クリエイト・ゴーレム】の魔

法をかければ出来上がり。

【魔法樹の木片】の効力を失わずにほうきを作るのがちょっと難しいかな。

俺の周囲に4本ほど配置して、近づいた敵をバシバシ叩く予定だ。非殺傷兵器だがあたるとかなり痛いぜ？

次は秘密兵器その2【リビング・ロープ】こいつも作り方は【リビング・ブルーム】と一緒に【魔法樹の木片】でロープを作り【クリエイト・ゴーレム】の魔法をかけるだけ。

こいつで無力化した奴を順次縛っていくつもりだ、たぶん大量に縛らなければならないし、いちいち手作業ではやってられない。

ちなみにロックが【リビング・ロープ】にかなり興味をしめしていた。

「これ、店に置いたら売れそうっスねー、僕に売ってくれないスか？」

「いいけど、卸値は一本1万5千CRMになるよ？材料費が高いから」

と、言ったら。

「一本1万5千CRMなら売値は3万で？売れるか？僕なら買わないけど、懐のあったかい冒険者なら…（ぶつぶつ）」

と、ぶつぶつ言いながら長考モードに入ってしまった。

ロックがなにやらぶつぶつ言ってる状態だが、とりあえず襲撃の準備は整った。

さて、反撃開始といきますか！

## 6 話目っばい 突っ込む

カフタス（不良集団のボス） side より

ちっ、気にいらねえな。

目の前の机に蹴りを入れる。

ガタンツ！と大きな音がしたのに驚き、傍に侍っている部下がビクツと肩を震わす。

「斥候に出した5人組は、まあだ、帰らねえのか？」

「ハッ、い、今だ、帰還してないようです」

「ちっ、衛兵に突き出された様子は？」

「それも、報告がありません」

「ちっ！」

ドガシャーン！再度目の前の机に蹴りを入れる。

気にいらねえ、気にいらねえなあ！

失敗して捕まったのならかまなわえ、だが、うまくいったのに報告がねえなら裏切ったと見ていい。

クソが！ゴミ拾い程度しか出来ねえ無能クズが俺に楯突たてつこうとしているのか？舐めやがつて。

甘やかしすぎたか？

炙り出すのは面倒だが、裏切ったのなら肅清しねえとな、弱いくせ

に手間を掛けさせやがって。

あいつらぜってえ殺す！見せしめも兼ねて派手に殺さねとなあ！  
と、クス共の処刑方法を考えていると突如

ドゴオオオオオン！ という凄まじい爆発音が聞こえてきた。

！！！！

なっ、なんだ今の音は！？

バタバタバタッ！

部下が駆けつけてきた。

「た、大変です、ボス！、て、敵襲です！」

「なにに？敵襲だあ？どこのチームが攻めてきやがった！？」

「それが、例の5人組が裏切ったようで…」

「ああ！？あいつらか…、だったら、さっさとつぶせ」

「いえ、それが滅法強い助っ人がいまして、しかも一人は魔術師です」

「魔術師だと…ちっ、仕方ねえ、俺が出てやる！敵はどこだ！」

「い、今は、中庭の辺りにいます！」

魔術師か…めんどうな、さっきの爆発音はそいつか？

まあ、あんな音を出すほどの魔法を使っただ、MPはほとんど残ってねえだろ。

どんな奴らか知らねえがLV33のこの俺に勝てる奴なんざいねえ、ぶっ殺してやる！

愛用のショートソードを手に取り、中庭に駆けつけた俺が見た光景は、信じられないような物だった。

赤髪の大柄な男が手にしたハルバートを振るう度<sup>たび</sup>に俺の部下が吹っ飛ばされている。

それも信じ難い光景だったが、もうひとりの男が周囲に4本のほうきを浮かべて部下達をしばき倒しているほうが信じられねえ。

何だこいつは！？あんな魔法は見たことも聞いたこともねえぞ！？クソが！正攻法じゃ無理かあ？  
ん？あの五人組は隙だらけだな…。

シロウside 　　ちょっと時間を遡って開始。

さて、下っ端5人組に案内されてやってきました敵のアジト。  
どうやら元は貴族の屋敷だったみたいで無駄に広い、まあ、ここも崩れかけているんだけど…。

んで、裏口からこそそこそと進入して、ボスをキュッと絞めるつもりだったんだけど、あっさり見つかってしまいましたとき。

「ん？こんなところで何をしている…って、ほうきが浮いてる！？  
なっ、なんだ貴様はっ、グハッ！」

といった感じで。

まあ、ロツクは歩くとガチャガチャ音がする重鎧装備だし、俺も潜



入ミツシヨンに慣れてるわけじゃないしょうがないよねえ。

というか、俺のほうきがなければごまかせてたような気もするが小さなことはキニシナイキニシナイ。

さて、見つかってしまったのはいいんだけど、敵があとからあとから出てくるのがめんどい。

ロックの武器はハルバートだし、俺の魔法も狭い所だと戦いにくい。広いところにでるか。

「顕現せよ！フレイムアロー！」

ドゴオオオオオーン！

「よし、壁を壊したからここから出るよ！」

「シロウ…、君は無茶苦茶するっスねえ」

「…もはや、あつしらはついて行くだけでさあ」

とりあえず、壁を壊して敵の方位を突破し、広い場所を探すことにした。

しばらく走っているとおあつらえ向きの場所にでた。

赤茶けた土がみえるし、大分荒れ果てているけど、ここは中庭かな？

広い場所に出れたロックは絶好調だ。

人をポンポン吹き飛ばしてる、ハルバートを振り回す度に、2、3人程吹っ飛ぶ、人間で飛ぶんだなあ。

吹っ飛んだ後も生きてるみたいだから、一応手加減はしているようだ。

ロックを手強いと見て俺の方にきた奴らは即座にほうきにしばかれ

る。

ちなみに、道案内5人組は（。。。）ポカーンとした顔をしながらその光景を見つめているので戦力としては役に立っていない。

しばらくロツクと二人で無双していたが、そろそろ飽きてきたなあ、これからどうしよう？

確か構成員は300人って言ってたから全部倒さないといけないのかな？とか考えていたら。

「動くな！これを見る！」

という声がひびいた。

見ると道案内の5人組のひとりが厳ついにーちゃんに捕まって首元にナイフを押し当てられていた。

厳ついにーちゃんのLVは33だ。

ここの構成員と比べて群を抜いてレベルが高いから、こいつがボスっぽい、解析を掛けてみるとステータスはこんな感じだった。

|     |     |
|-----|-----|
| LV  | 33  |
| HP  | 251 |
| MP  | 173 |
| ST  | 211 |
| STR | 253 |
| VIT | 251 |
| DEX | 171 |
| AGI | 173 |
| INT | 153 |
| RES | 155 |

うむ、中々強いな

まあ、それは置いて。  
どうしようかな？

とか考えているとロックが

「彼らは解放する条件で道案内を頼んだだけで、別に僕らの仲間ってわけじゃないスよ」

と言って、武器を構えて突撃しようとした。

僕らって事は、俺は仲間扱いなんだなあ、いやそれはどうでもいいか。

とりあえずここは…。

「ロック、ここは従おう」

「え？なに言ってるんすか？」

「いいから、いいから」

ロックに、俺に考えがあるぜえと目配せを試みる。  
とりあえず信用してくれたように止まってくれる。

「武器を捨てろ！その魔術師は発動体もはずせ！あと、その変なほつきも止める！」

ロックは武器をガチャーン！と投げ捨て俺もほつきに送っている魔力を止める。

さらに【マジックグローブ】をはずして放り投げる。

ついでに服の袖をまくりあげ、手に何も持っていないことをアピールする。

「これでいいかい？」

「あつしらのために…スイヤセン」

5人組のひとりが申し訳なさそうに言う。

それに対して大丈夫だよと男前な笑顔を返してみる。

それを見た5人組は、あつしらはあつしらは、うおーんと男泣きを始めてしまった。

いや、そんな感動の場面じゃないからね？

男前な笑顔はギャグだし、実は全然ピンチじゃないのよ？

さて人質をとって俺たちに武装解除させたボスだが。

部下に人質を預けて俺の方に近づいてきた。

んむ、偉そうに命令してるからやっぱこいつがボスだな。

「なめた、真似してくれやがったなあ！ああっ！？てめえは俺が殺す！」

とか、いいながらナイフで斬りかかってきた。

ええ？直接攻撃してくるの？武器持ってないとはいえ、まだ俺動けるんだよ？

俺なら、この状況だったら部下に蛸殴りをさせるんだけどなあ。

だって仮にもボスの君が来たら。

「簡単に一発逆転出来てしまっじゃないか」

相手の攻撃を左に一步足を踏み出しかわし、そのまま自分側に巻き

込むように回転しながら左拳で相手の右頬を殴る。

変形しているが左フックという奴だ。

ボス（笑）は俺の右後方へときりもみしながら吹っ飛んで行った。

そして、すかさず無詠唱で準備していた【パラライズ・ミスト】を人質をとっているやつに発動させる。

【魔法の才能　　】を持つてる俺は発動体なしかつ無詠唱で魔法を使えるのだよ。

人質も巻き込んだじゃうけどしょうがないよね？

この魔法をくらうと長時間正座した後のようなぴりぴりを全身で味わう事になるんだよなあ。

と言う訳で、人質を取ってるやつを無力化したわけだが、何故だか周りがシーンとしている。

「ぼ、ボスが一撃で？」

「魔術師のくせに格闘もできるのか？」

「今、詠唱無しで魔法使わなかったか？」

「無理だ、俺たちに勝てるわけが無い」

お？意気消沈か？

今まで、味方がぼんぽん飛ばされても向かって来るから、なんて戦意の高い奴らだと思ってたんだけど、ボスが怖かったら降伏できなかったとかかな？

とりあえず降伏勧告でもしておくか。

「君らのボスは倒したけど、まだやるかい？」

と、にこやかに言ったところ、一人、二人と、武器を捨てて降参のポーズをとっていき、最後は全員降参した。

さて、不良グループの武装解除が済んだわけだが、戦後の処理はどうするべか？



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8585x/>

---

異世界トリップっぱい

2011年12月25日12時01分発行